

遺傳黴毒兒肝臟ニ於ケル組織學的變化ニ就テ

岡山醫科大學病理學教室（主任田村博士）

横 尾 秋 夫

目 次

一. 緒 言	顯微鏡的所見
二. 研究方法	第六例
三. 實驗例	臨牀診斷
第一例	解剖診斷
臨牀診斷	顯微鏡的所見
解剖診斷	四. 結締組織維ノ増殖ニ就テ
顯微鏡的所見	文 獻
第二例	考 按
臨牀診斷	五. 造血現象ニ就テ
解剖診斷	文 獻
顯微鏡的所見	考 按
第三例	六. 「プラスマ」細胞ニ就テ
臨牀診斷	文 獻
解剖診斷	考 按
顯微鏡的所見	七. 格子狀纖維ニ就テ
第四例	文 獻
臨牀診斷	考 按
解剖診斷	八. 總 括
顯微鏡的所見	九. 結 論
第五例	十. 文 獻
臨牀診斷	十一. 附圖説明
解剖診斷	十二. 附 圖

一 緒 言

抑々黴毒ノ遺傳スルモノナルコトハ已ニ前世紀ノ中頃ヨリ Ruge,⁹⁶⁾ Birch-Hirschfeld,¹²⁾ c. Hecker,³⁸⁾ v. Winkel,¹⁸⁶⁾ Albers-Schönberg³⁾ 氏等ノ檢索ニ依リテ明

ラカトナレリ、而シテ此遺傳シタル微毒胎兒乃至微毒兒ノ研究モ亦甚ダ多數ノ人々ニ依リテ種々ナル方面ニ於テ行ハレタリ、即チ Weber,¹³¹⁾ Runge,⁹⁷⁾ c. Ruge,⁹⁶⁾ v. Baerensprung,⁶⁾ Zeissl,¹³⁰⁾ c. Hecker,^{38, 39)} E. Wagner,¹²⁹⁾ Hintzen,⁴⁶⁾ Wegner,¹³²⁾ Birch-Hirschfeld,¹²⁾ Heubner,⁴⁴⁾ Müller,⁸⁰⁾ Barthélemy,⁸⁾ Mracek,⁷⁹⁾ Kassowitz,⁶⁾ Hutinel u. Hudelo⁵¹⁾ 氏等ノ如シ、殊ニ Wegner¹³²⁾ 氏ハ微毒性骨軟骨炎ヲ發見シ、Heubner⁴⁴⁾ 氏ハ腦動脈ニ微毒性變化ノ存在セルヲ發見シ之ガ研究ヲ爲セリ。

就中遺傳微毒兒ノ肝臟ノ變化ハ最モ早クヨリ研究サレ、1848年ニ Gubler³³⁾ 氏ガ肝臟ニ來レル瀰蔓性疾患ニ就キ精細ナル研究ヲ爲シ、此變化ハ微毒ニ固有ナルモノナリト記載セルニ始マル、爾來多數ノ學者ニ依リテ研究サレタリ、即チ Testelin,¹¹⁸⁾ Schott¹⁰⁶⁾ 氏ノ業績現レ續イテ E. Wagner,¹²⁹⁾ Baerensprung,⁶⁾ Förster,³³⁾ Howitz,⁵⁰⁾ c. Hecker,³⁸⁾ Hintzen,⁴⁶⁾ Caillé,¹⁷⁾ Schüppel,¹¹⁰⁾ Déjérine,²²⁾ Barthélemy,⁸⁾ Tepel,¹¹⁷⁾ Birsch-Hirschfeld,¹²⁾ Baumgarten,⁹⁾ Beck,¹¹⁾ Chiari,¹⁹⁾ G. Meyer,⁷⁷⁾ Lomer,⁶⁵⁾ R. Müller,⁸⁰⁾ Hutinel u. Hudelo,⁵¹⁾ Schlichter,¹⁶³⁾ Haars,⁸⁰⁾ Tobeitz,¹¹⁹⁾ Kiderlen,⁵⁸⁾ Marchand,⁷⁰⁾ Loder,¹⁴¹⁾ Erdmann,²⁷⁾ v. Werdt¹³³⁾ 氏等研究業績ノ發表サルルニ至レリ、其結果肝臟ニ來レル微毒性變化ヲ大體ニ二ツニ別テリ、即チ瀰蔓性ニ來ルモノ及ビ限局性ニ來ルモノ之ナリ、或ハ又之ニ更ニ粟粒性微毒腫ヲ加ヘテ三種ニ別テタル者アリ、以上ノ内ニテ最モ多數ニ來ルハ Wagner¹²⁹⁾ 氏ノ云フ瀰蔓性硬變又ハ瀰蔓性微毒腫 Diffuse Syphilom ト云フ可キモノニシテ、其極メテ輕度ナルモノニ在リテハ肉眼上餘リ著明ナル變化ヲ認メザレ共、更ニ進ミタルモノニ於テハ其容積ハ大トナリ、表面ハ所々ニ帽針頭大ヨリ「レンズ」大ノ溷濁セル黃色ノ斑點ガ現レ、大ナル門脈枝ヲ取圍ム結締織ガ肥厚シ、肝臟被膜モ亦往々慢性腹膜炎ノ狀ヲ呈スト云フ、然レ共其極メテ輕度ナルモノニ在リテモ之ヲ顯微鏡的ニ檢スル時ハ其程度ニ於テ差ハ存スレ共皆一樣ニ固有ナル變化ヲ有スルモノナリ、即チ上記變化ノ進ミタルモノノ割面ニ於テ見ル白點、即チ Birch-Hirschfeld¹²⁾ ノ云フ葉間結締織ノ増殖セルモノ或ハ門脈枝ノ周圍ノ結締織ノ増殖セルモノ等ハ極メテ輕度ナル場合ニ於テモ已ニ現ハルルモノナリ、此他胎生期ニ行ハルル機能ノ殘存、異常細胞ノ發現、肝細胞自身ノ變化及ビ近ク屢々論議サルル格子狀纖維ノ發育乃至其性質等ニ於テ一定ノ變化ヲ來タサシムルモノナリ。

二 研究方法

本研究ニ用ヒタル材料ハ「フォルマリン」ニテ硬化シ蓄ヘラレタルモノナリ、此ノ小片ヲ取リ「ツェロイデン」及ビ「パラフィン」ニテ包埋シ、尙ホ必要ニ應ジテ氷結切片製作法ニヨリ 10 乃至 20「ミクロン」ノ切片ヲ作り、之ヲ「ヘマトキシリン、エオデン」ノ重複染色、ワンギーソン氏ノ結締織纖維ノ染色法、ウンナ、バッペンハイム氏ノ「プラズマ」細胞染色法、ビルシヨウスキー氏ノ神經纖維染色法ノ變法ニ依ル格子狀纖維ノ染色法ヲ應用シ、以テ増殖セル結締織ノ状態、異常細胞ノ研究及ビ格子狀纖維ノ變化等ノ検査ニ供セリ。

三 實驗例

第一例 篠○光○ 三箇月 男性

臨牀診斷 遺傳毒並ニ肺炎

解剖診斷

- 一. 兩側加答兒性肺炎.
- 二. 骨軟骨炎.
- 三. 兩腎ノ畸形.
- 四. 加答兒性氣管枝炎.
- 五. 鬱血肝.
- 六. 輕度ノ脾腫.
- 七. 心筋ノ貧血及ビ混濁.
- 八. 卵圓孔ノ開在.
- 九. 右腎及ビ膀胱粘膜ノ出血.
- 十. 腸間膜淋巴腺ノ腫脹.

顯微鏡的所見

弱擴大 肝小葉ノ状態ヲ見ルニクリツソン氏鞘及ビ中心靜脈ノ周圍ハ結締織ノ増殖甚ダシク細胞柱ハ往々不規則ナル位置ヲ爲シ正常ノ肝細胞柱ノ如ク放射狀ヲナサズシテ、勿論中心靜脈ヲ中心トスレ共著シク屈曲ヲ爲シ、往々細胞ガ横ニ數箇連ルモノアリ、肝細胞自身モ其核ガ「ヘマトキシリン」ニ濃染セルモノト或ハ薄ク染色セルモノアリテ著シク不同ナリ、肝小葉自身モ比較的高度ニ不規則ニシテ著シク壓平サレタルモノ或ハ之ニ隣接シテ著シク大ナルモノアリ又中心靜脈ガ著シク周邊ニ近く存在スルアリ、中心靜脈ハ充血ヲ示サズ、一般ニ小葉ハ正常ヨリ小ナルガ如シ、小葉間結締織ハ高度ニ發育シ、此結締織ヨリ肝小葉ノ肝細胞柱ノ間ニ多數ノ突起ヲ出ステ見リ、小葉内ニ於テモ所々網狀ニ發育シテ細胞群ヲ取圍ムモノアリ、上記小葉間結締織ヨリ小葉内ニ進入セル突起ハ其先端ニテ分レテ肝細胞内ニ入り込ム。如斯肝細胞柱ノ間ニハ多數ノ圓形ノ核ヲ有スル原形質ニ乏シキ細胞ガ群ヲナシテ存在シ肝細胞柱ト平行

ニ細胞列ヲ形成ス。此細胞群ハ所々著シク膨隆シ、即チ多數ノ細胞ガ群ヲ爲シ爲ニ肝細胞柱ハ一方ニ壓迫サレタルガ如キ狀ヲ呈シ、殊ニグリツソン氏鞘ニ近キ部ニ於テ稍多數ニ存在スルガ如シ、或ハ又著シク大ナル細胞群ヲ形成シ爲ニ肝細胞柱ハ中途ニ於テ切斷サレタルガ如キ狀ヲ見ル事アリ、或ハ又大ナル如斯細胞群ノ間ニ數箇ノ肝細胞ガ島嶼狀ニ存在スル場合アリ、如斯細胞群ヲ熟視スル時ハ「ヘマトキシリン」ニ濃染セルモノト染色度ノ著シク弱キモノアリ、或ハ著シク大ナル核ヲ有スル大ナル細胞アリ、淋巴球ノ如ク小ナル細胞ニテ原形質ニ乏シキモノアリ或ハ原形質ニ富ムモノアリテ著シク不同ナリ、又著シク「エオゲン」ニ濃染スル顆粒ヲ有スル細胞アリ、此「エオゲン」嗜好細胞モ圓形ナルアリ菱形ナルアリ種々ナル形態ヲ爲ス、如斯細胞群ガ往々ニシテ血管腔内ヲ充スモノアリ、或ハ肝細胞柱周毛細管ノ擴張セル部分ニ於テハ肝細胞柱ニ接シテ一方毛細管トノ關係ナク存在スルアリ、肝細胞柱間ノ毛細管ハ所々擴張セル部分ヲ見ルモ一般ニ充血ハ少ク、中心靜脈及グリツソン氏鞘内ノ血管モ輕度ノ充血ヲ示ス、如斯血管ノ周圍ニ於テ特ニ上記ノ如ク結締織ノ増殖ヲ認メ、如斯結締織中ニ於テ上記ノ如キ異常細胞ノ往々群ヲ爲スモノアリ、他ノ小葉間結締織モ亦小ナル圓形細胞ノ浸潤セルヲ認ムル事ヲ得、膽道上皮ハ往々腫脹シテ菊花ノ如ク見ユルアリ、此周圍ニ於テモ血管ニ於ケルト同様ニ結締織ノ厚キ鞘ニ依リテ取圍マルルヲ見ル、又所々ニ於テ稍々「エオゲン」ニ染色セル核ニ乏シキ透明ナル島嶼狀ノ如キ部分ノ存在スルアリ、上記異常細胞群ハ又往々小葉間結締織ニ沿ヒテ肝細胞トノ間ニ横ニ竝ブモノアリ、如斯細胞群モ亦其大サ種々ニシテ殆ド乃至數箇ノ層ヲ成セルアリ或ハ又多數ノ細胞群ガ帶狀ヲナシテ配列セルモノアリ、或ハ小葉間結締織ヨリ小葉内ニ進入スル結締織束ニヨリテ中斷サレタルガ如キ觀ヲ呈スルモノアリ、格子狀纖維ハ一般ニ増殖シ殊ニ被膜下、小葉間結締織ノ部及ビ中心靜脈附近ニ於テ高度ナリ、殊ニ此部ニ於テ著シク肥厚セル纖維ヲ見ル、如斯纖維ハ屈曲急ニシテ圓滑ヲ失フ、往々小葉内ヲ多數ノ纖維ガ束ヲ爲シテ走り先端ニ於テ別レテ肝細胞間ニ進入スルモノヲ見ル、尙ホ網狀ニ配列セル本纖維ノ網内ニ上記異常細胞ガ數箇存在スルモノガ互ニ接シテ多數ニ集レルモノアリ。

強擴大。肝細胞ヲ見ルニ一般ニ圓形乃至橢圓形ナルモ其細胞形ハ種々ニシテ正常ナル細胞ノ他ニ稍々原形質ニ乏シク細胞體ノ小ナルアリ、核中ニ「クロマチン」乏シクシテ核小體ノミ著明ナルアリ、或ハ壓平サレテ紡錘形ヲ爲スモノアリ、核ガ浮腫狀ニ膨隆シ正常ノ核ノ二倍大ニ達スルモノアリ勿論核質ニ乏シ。如斯肝細胞ハ只數箇集リテ肝細胞柱ヲ爲スモノアリ。如斯肝細胞柱ノ間ニ種々ナル異常細胞ヲ入ル、此異常細胞ト共ニ多數ノ赤血球及ビ稀ニ有核赤血球ヲ有ス此有核赤血球ハ正常ナルモノノ他ニ之ヨリ核ハ稍大ニシテ核ノ構造明カナラザル原形質ノ輕度ニ染色スル即チ正常ノ有核赤血球ヨリ「エオゲン」ニテ稍々淡ク染色スルモノアリ、或ハ同大ニシテ又ハ稍々大ナル細胞ニテ其原形質ノ只一部ノミノ染色セルモノアリ、全く同様ノ細胞ニテ「エオゲン」ニテ染色スル部分ヲ有セザルアリ、以上ノ細胞ハ一般ニ其核ハ核質ニ富ミ核ノ構造ハ殆ド不明ナルモノナリ。尙ホ一方此細胞ヨリ稍々大ニシテ核モ大ナルモ核質ニ乏シキ細胞アリ、大ナルハ上記細胞ノ殆ド二倍大ヲ爲スモノアリ、如斯モノニアリテハ原形質ハ「エオゲン」ニ染色スル部分ヲ有セズ。上記諸細胞ニ於テ往々核分裂像ヲ見ルコトヲ得。一方ニ於テ有核赤血球ニ於テモ其核ノ著シク小ニシテ細胞ノ一部ニ點狀ニ存在スルモノアリ以上ノ諸種異常細胞ノ他ニ尙ホ大ナル單核白血球及ビ「エオゲン」嗜好人單核細胞アリ此細胞ハ往々上記異常細胞群中ニ介在スルモ時ニ小葉間結締織内ニ存在スル事アリ。或ハ著シク大ニシテ核ノ大サ肝細胞ノ夫ヨリ大ニシテ比較的

質ニ乏シキモノアリ此原形質ハ肝細胞ノ夫ヨリ「エオゲン」ノ色ヲ取ラズシテ稍々灰色ヲ呈スルモノアリ又核ノ屈曲シテ核質ニ乏シク細細胞體モ々細長ニシテ時ニ紡錘形ヲ取レルモノアリ。上記諸細胞内ニハ細胞ガ往々「ネクローゼ」ニ陥リ核質ハ一方ニ押寄セラレ核自身ハ殆ド大ナル空胞ニ化セルモノアリ。

肝細胞柱ノ間ニハ所々結締織細胞ノ増殖セルアリ、或ハ又 Fibroblasten ナモ見ルコトヲ得。結締織ハ小葉間結締織及ビ中心靜脈ノ周圍ニ於テ高度ニ發育シ、殊ニケリツソン氏鞘ニ於テ各血管及ビ膽道ヲ取圍ミテ輪狀ニ走ル結締織ハ勿論之等ヲ共ニ取圍ミテ高度ニ増殖ヲ營ム、爲ニ此部ニ於テ結締織層ハ特ニ其厚サヲ増ス、如斯増殖セル結締織中ニハ又種々ナル細胞ノ浸潤アリ、即チ圓形細胞ノ中等度ノ浸潤ノ他 Fibroblasten 或ハ又「プラスマ」細胞ノ浸潤アリ、尙ホ到ル所「エオゲン」嗜好大單核細胞ノ存在スルヲ見ル、此細胞ハ圓形乃至ハ橢圓形ヲ爲スモ往々又菱形ヲ呈スルモノアリ。

格子狀纖維ハ小葉間結締織ニ近キ部及ビ中心靜脈周圍ニ於テ高度ニ増殖シ、此兩方ヨリ小葉内ニ肝細胞ヲ纏絡シツツ其間ヲ走り而シテ小葉間結締織ト中心靜脈トノ中間部ニ於テハ往々其増殖ヲ認メザルアリ、或ハ逆ニ減少ヲ示スモノアリ、而シテ此纖維ハ一般ニ正常ノモノニ比シテ其屈曲稍々急ニシテ圓滑ヲ失ヒ且到ル所高度ノ肥厚ヲ示シ著シク不同トナル即チ一部ニ於テハ著シキ肥厚ヲ示シ、其纖維ガ次ノ部ニ於テ直チニ著シク纖細トナル、又至ル所膠化セル部分アリ、如斯變化ハ殊ニ小葉間結締織及ビ中心靜脈附近及ビ肝臟被膜下ニ於テ多數ニ見ラル。肝臟被膜下ニ於テハ纖維ハ被膜ニ平行シテ走り小纖維ハ之ヨリ別レテ肝小葉内ニ進入シ肝細胞ヲ纏絡シツツ肝細胞柱ノ間ヲ走ル、上記肝細胞柱ノ一方ニ押寄セラレタル如キ狀ヲ爲ス部分ニ於テハ本纖維モ一部ハ同時ニ押寄セラレテ殆ド完全ニ肝細胞ヲ纏絡スルヲ見ル、尙ホ一方ニ於テハ本纖維網ノ間ニ上記種々ノ異常細胞ガ含有サレ見本纖維ガ異常細胞ヲ纏絡スルガ如キ狀ヲ呈ス然レ共此部ニ於ケル格子狀纖維ハ他ノ部ニ比シテ少ク甚シク鬆疎ナリ。或ハ又小葉間結締織部ニ増殖セル纖維ノ纖細ナルモノ及ビ肥厚セルモノガ束テナシテ小葉内ニ進入シ肝細胞柱ノ間ヲ纖細ナル纖維ヲ出シテ周圍ノ肝細胞ヲ纏絡シツツ走り、先端ニ至リテ終ノ如ク一時ニ別レテ各肝細胞内ニ進入シテ此部ノ細胞ニ纏絡スルモノアルヲ見ル。

第二例 藤○政○ 一箇月六日 男性。

臨牀診斷 遺傳徽毒。

解剖診斷

- 一. 兩肺ノ護膜腫.
- 二. 肝臟ノ鬱血及ビ混濁.
- 三. 腎臟ノ混濁.
- 四. 脾腫.
- 五. 腸、睾丸、肺、腎臟ノ小出血.
- 六. 腸濾胞ノ腫脹.
- 七. 肺ノ浮腫.
- 八. 副脾.
- 九. 心筋ノ混濁.

十. 卵圓孔ノ開在.

十一. 臍靜脈ノ開在.

十二. 全身黃疸及ビ浮腫.

顯微鏡的所見.

弱擴大. 本例ハ定型的遺傳蠟毒性肝硬變症ノ狀ヲ呈スルモノニシテ全視野ノ過半ハ高度ニ發育セル結締織ニシテ其間ニ肝細胞柱ガ互ニ距テラレテ存在ス、此肝細胞ハ往々萎縮セルモノアリ、或ハ高度ニ發育セル結締織ノ間ニ肝細胞ガ數箇群ヲ爲セ、ロノガ島嶼狀ニ存在シ、此細胞モ往々萎縮シ又ハ「ネクローゼ」ニ陥レテ見ル尙ホ「ワットソン氏鞘」、中心靜脈ノ周圍、殊ニ高度ニ發育シ、之ガ小葉内ノ高度ニ發育セル結締織ト合シテ小葉葉ハ著シク不明トナル、如斯不規則ナル像ノ中ニ所々多數ノ種々ナル形態及ビ染色度ヲ有スル細胞群ガ一ツツノ結節ヲ形成スルモノアリ、此細胞群中ニ往々數箇ノ肝細胞ヲ見ル事ヲ得、又往々無構造ナル「エオザン」ニテ淡ク一様ニ染色サルル竈アリ之ハ或ハ上記細胞群中ニ存在シ、或ハ其外ニ存在スルコトアリ、上記種々ナル染色ヲ爲スモノノ内ニハ「ヘマトキシリン」ニテ高度ニ染色サルルアリ、淡ク染色サルルアリ、或ハ「エオザン」嗜好顆粒ヲ有スルアリ、之等ノ細胞ハ其大サモ亦種々ナリ、如斯細胞ハ肝細胞柱ノ間ニモ多數ニ見ラレ往々赤血球ヲ混入ス、又血管内ニ於テモ見ル事ヲ得、此細胞群ハ一般ニ肝小葉ノ邊周ニ近く存在シ、時ニ小葉間結締織ニ接シ、或ハ血管ニ接シテ群ヲナシ、血管周圍ノ結締織ガ著シク薄クシテ殆ド其腔ニ接スルガ如キ狀ヲ呈スルアリ或ハ更ニ進ミテ血管腔ト細胞竈トノ間ニ何等間隙ヲ有セスシテ接シ一見腔内ニ移行セル如キ觀ヲ爲スモノアリ、時ニ上記異常細胞ガ只二乃至三箇ノ群ヲ爲シテ肝細胞ノ間ニ挿マレタルアリ、又上記細胞竈ハ中心靜脈ノ周圍ニ存在スル場合アリ、然レ共此部ニ存在スルモノハ他ノ部ニ於ケルモノアリ一般ニ甚ダ小ナリ、時ニ一見圓形細胞ノ輕度ナル浸潤ニテ中心靜脈ガ取圍マレタル如キ程度ノ狀態ヲ呈スルモノアリ、如斯異常細胞竈ハ上記ノ如ク種々ナル細胞ヲ有スルモノナレ共時ニ其形態殆ド同一ニシテ圓形細胞ノ浸潤セルヲ思ハシムル如キアリ、然レ共之ヲ精細ニ檢スル時ハ尙ホ上記セル異常細胞ナルコトヲ知り得、

肝細胞ハ上記ノ如ク萎縮「ネクローゼ」ニ陥レルモノアリ亦其細胞體ノ核ノ大サ、「ヘマトキシリン」ニ依ル染色度等著シク多樣ナリ、膽道ハ往々壓平サレテ見出スニ困難ナルモノアリ、肝細胞中ニハ又稍々核質ニ富ミ細胞體圓形又ハ橢圓形ニシテ正常ノモノヨリ小ニシテ異常細胞ト鑑別ニ苦シムモノアリ、

血管ハ一般ニ稍々血量ニ富ミ、中心靜脈ハ殊ニ其周圍ニ異常細胞竈ヲ有スルモノニ於テ其橫斷面ハ著シク不規則ニシテ往々壓平サレ、中ニ數箇ノ血球乃至ハ異常細胞ヲ有スルモノアリ、

結締織ノ狀態ヲ「ワットソン氏染色法」ニヨリテ檢スルニ全視野ハ種々ナル方向ニ走レル結締織纖維ガ網狀ヲ形成シ又多數ノ結締織纖維ヲ集リテ帶狀ノ層ヲナシテ走行スルアリ、肝細胞及ビ異常細胞竈ハ此間ニ介在シ、此異常細胞竈中ニモ亦結締織纖維ヲ進入スルヲ見ルモノアリ、然レ共此竈ノ周圍ニハ殊ニ結締織纖維ノ多キヲ見ル、血管周圍ニ於テハ輪狀ニ圍ミテ發育シ外側ニ存在スル纖維ハ上記網狀ヲ爲スモノニ移行スルヲ見ル、此血管周圍ノモノモ往々不規則ニテ一側ニノミ高度ニ發育ヲ示シ他側ニ於テハ比較的發育ヲ見ザルモノアリ、格子狀纖維ハ被膜下、中心靜脈ノ周圍、肝細胞ヲ纏絡スルモノニ於テ稍々増殖ヲ示スモ一般ニ著シク肥厚ス、其他ノ部ニ在リテハ一般ニ減少ヲ認メ往々全然見ザルモノアリ、

強擴大. 肝細胞ハ細胞柱ヲ形成セスシテ一箇乃至二、三箇ガ群ヲナスモノ多ク其間ヲ多數ノ結締織ヲ

以テ距テラル、其肝細胞モ種々ナル形態ヲ爲スモノ多ク大體ニ於テ稍々小ナリ、核ハ「ネクローゼ」ニ陥レルモノアリ、「ピクノーゼ」ヲ示スモノアリ、原形質モ少クシテ核ノ周圍ニ狹キ層ヲ爲シテ取圍ムモノアリ、或ハ又核モ稍々小ニシテ核質ニ富ミ原形質モ少ク圓形又ハ橢圓形ヲ爲シ稍々異常細胞ニ近キ形態ヲ有スルモノアリ。小葉間結締織ハ著シク發育シ殊ニグリツソン氏鞘ノ部ニ於テ各血管、膽道ヲ取圍ム結締織ガ著シク發育シ此外側ニ存在スルモノハ肝小葉ノ内部ニ發育セル結締織中ニ移行ス、肝小葉内ニ於テモ多數ノ結締織ガ發育シ種々ナル方向ニ走行セル結締織束ノ爲メニ肝細胞ハ上記ノ如ク其網内ニ島嶼狀ニ存在スルノ觀ヲ呈ス、或部ニアリテハ相當ニ廣キ部分ガ殆ド肝細胞ヲ見ズシテ只種々ナル方向ニ交叉シテ走ル結締織纖維ノミヨリナリ其間ニ種々ナル異常細胞ノ存在スルヲ見ルモノアリ、其結締織層中ニハ比較的幼若ナルモノ多ク又往々 Fibroblasten ヲ有ス、此結締織束ハ多數ノ纖維ノ束ヲ爲スモノアルモ一般ニ餘リ太キ束ヲ爲サズシテ一方ノ束ニ在リシ纖維ハ忽チ別レテ他ノ纖維束ニ入ルガ如キ狀ヲ呈シテ所謂結締織網ヲ形成ス、此間ニ往々星芒細胞或ハ二三ノ血液細胞ヲ入ルルヲ見ル事ヲ得、血管ハ餘リ充血ヲ示サズ、如斯組織ノ間ニハ到ル所點在性ニ數箇ノ比較的核質ニ富メル中等量ノ原形質ヲ有スル細胞アリ、往々此細胞ニ混ジ其形態稍々大ナルモ核質ニ乏シキ細胞ヲ有ス、此細胞ハ前者ヨリ其原形質モ稍々多シ、又所々毛細管、血管内ニ有核赤血球ヲ含有スルアリ、以上ノ細胞ハ到ル所上記ノ如ク二三ノ群ヲナシテ存在スルモ所々又著シク大ナル細胞窠ヲ形成スルモノアリ、此窠内ニハ上記原形質ニ富メル核質ニ乏シキ稍々大ナル細胞ハ比較的少量ニ存在シ尙ホ之ヨリ小ニシテ核質ニ富ム、上記細胞ハ著シク多數ナリ、而シテ此細胞中ニハ往々其原形質ノ一部ガ「エオゲン」ニテ淡ク染色サルモノアリ此染色部位ハ小ナルハ點狀ニ近キモノヨリ斑點狀ヲ爲スモノ、或ハ原形質ノ全體ガ淡ク染色サルモノアリ、但シ如斯細胞ハ一般ニ稍々小ナルガ如シ、時ニ其染色度ノ強クシテ殆ド赤血球ニ近キ色ヲ採ルモノアリ、或ハ又核ノ外側ニ接シテ光澤ヲ異ニセル一種ノ屈折ヲ示ス部分ノ存在スルアリ、此部ノ往々ニシテ核ノ周圍ヲ取圍ム、或ハ有核赤血球ト殆ド同大ナレ共其核、稍々大ニシテ幾分核質ニ乏シキ原形質ノ極メテ淡ク「エオゲン」ノ色ヲ採ルモノアリ、如斯細胞ノ間ニハ多數ノ核分裂像ヲ見ル。上記細胞窠ハ小葉ノ中央ニテ結締織ノ間ニ存在スルモノアルモ多クハ血管ニ近ク存シ、血管ノ周圍ヲ圍ム結締織ノ外側ニ接スルモノ多シ、到ル所ニ結締織中ニ散在スル小群ノ異常細胞中ニハ往々「ピクノーゼ」又ハ「ネクローゼ」ニ陥レル細胞ヲ有スルモノアリ。

小葉間結締織中ニハ尙ホ Fibroblasten 異常細胞及ビ「エオゲン」嗜好大單核細胞、單核白血球、淋巴球ノ浸潤ヲ見、且往々稀ニ此間ニ「プラスマ」細胞ノ介在スルアリ、小葉内ニ發育セル結締織内ニハ見出ス事ヲ得ズ、動脈血管ノ内皮細胞ハ所々剝離シ、或ハ「ネクローゼ」ニ陥リ、或ハ異常ニ膨隆シテ突出シ、又ハ剝離シテ血管腔内ニ游離セルモノアリ、靜脈管ニ於テモ略同様ナル變化ヲ見ル、血管内ニ上記異常細胞、大單核白血球ガ混入セルヲ認ム。膽道ノ變化ハ血管ニ比シテ稍々少キモ尙ホ上皮ノ「ピクノーゼ」等ノ變性及ビ剝離ヲ認ムル事ヲ得。

格子狀纖維ハ所々肝細胞ノ周圍ニ於テ著シキ増殖ヲ認ムルモ往々認メザルアリ殊ニ結締織ノ高度ニ發育セル部ニ於テ然リ而シテ纖維自身ハ一般ニ著シク肥厚シタルモノ多ク殊ニ其屈曲極メテ急ニシテ一見枯シタル樹枝ノ如ク、又肥厚ハ往々著シク不規則ニシテ一部ニ於テ著シキ肥厚ヲ見タル纖維ガ次ノ部ニ於テハ急ニ細クナルヲ見ルモノ多シ、尙ホ上記異常細胞窠ノ中ニ於テモ格子狀纖維ノ進入スルヲ認ム、

其量ハ多カラズ屈曲モ亦少シ、或部、殊ニ結締織ノ多數ニ増殖セル部ニ於テハ此纖維ハ屈曲少ク極メテ鬆疎ナル束ヲナシテ走ルモノアリ其途中ニ於テ殆ド纖維ヲ分タズシテ先端ニ至リテ分レテ細胞間乃至ハ結締織間ニ入ルモノヲ見ル。肝臟被膜下ニ於テモ所々増殖ヲ示シ極メテ細キ纖維網ヲ形成スルヲ見ル部分アリ、中心靜脉周圍ニ於テノ纖維ハ一般ニ肥厚シ、鬆疎トナリ中心靜脉ヲ正常ノ如ク取圍マズシテ著シク大ナル屈曲ヲ爲シテ不規則ニ取圍ミ一方多數ノ同纖維ヲ小葉内ニ送ルヲ見ル。

第三例 山〇ト〇 三箇月 女性。

臥牀診斷 遺傳微毒、加答兒性肺炎、腦膜炎。

解剖診斷。

- 一. 出血性軟腦膜炎。
- 二. 腦底ニ於ケル纖維性軟腦膜炎
- 三. 兩側沈降性肺炎。
- 四. 肉豆蔻肝。
- 五. 脾腫。
- 六. 心筋ノ脂肪沈着。
- 七. 兩側實質性腎臟炎。
- 八. 氣管枝加答兒。

顯微鏡的所見。

弱擴大 一般ニ小葉間結締織ノ輕度増殖ヲ認ム、中心靜脉ノ周圍モ 輕度ノ増殖アリ、肝小葉ノ内部ニ到ル所肝細胞柱ノ間ニ種々ナル大サノ圓形ナル異常細胞ノ群ヲ有ス、又肝細胞柱間ノ毛細管ハ一般ニ擴張シ上記異常細胞群ト共ニ多數ノ赤血球ヲ有シ、異常細胞ヲ有セザル毛細管モ亦擴張シテ多數ノ赤血球ヲ以テ充タサル。肝細胞柱ノ配列ハ異常細胞群ノ爲メニ往々不規則ナル位置ヲ呈スルモノアリ又毛細管ノ擴張セル爲メ肝細胞柱ハ著シク距テラレタル如キ觀ヲ呈ス、然ルニ中心靜脉ハ如斯キ著シキ充血ヲ示サズシテ且異常細胞ノ存在モ亦僅少ナリ、或ハ其血管腔ハ著シク狭メラレ往々殆ド腔ヲ殘サザルモノアリ、肝細胞柱ノ配列ハ上記ノ如ク往々不規則トナレルト同時ニ細胞柱自身ガ比較的的不規則ナル細胞ニヨリテ形成サレテ正常ナル肝細胞ニ連リテ細キ細胞ノ配列シテ一見肝細胞柱ガ左右ヨリ壓平サレタル如キ状態ヲ呈スルモノアリ。如斯細胞間ニ散在性ニ存在スル上記異常細胞ハ其大サニ於テノミナラズ其核ノ染色状態ニ於テモ亦著シク多種多様ナリ、此細胞ハ上記ノ如ク一般ニ散在性ニ存在スレ共所々ニ細胞竈ヲ形成シテ肝細胞柱ノ間ニ介在ス、此竈ハ又大サ種々ニシテ數箇ヨリ成ルモノ或ハ一方ニ數十箇ノ細胞ヨリ形成サルモノアリ、時ニ此大ナル竈ガ小葉間結締織中ニ存在スルヲモ見ルコトヲ得ルモ一般ニ肝小葉ノ周邊ニ近ク存シ往々小葉間結締織殊ニクワツソン氏鞘附近ニ存在スルモノ多シ、中心靜脉ト小葉間結締織トノ間ニ來ルモノニテハ肝細胞柱ヲ兩側ニ壓迫シテ毛細管腔ヲ充セルモノ或ハ一方ヲ壓迫シ肝細胞柱ハ一方ニ著シキ屈曲ヲナシテ異常細胞竈ハ橢圓形又ハ紡錘形ヲ爲スモノアリ、中心靜脉ノ周圍ニ於テハ他ノ部ニ於ケルヨリ比較的少クシテ有セザルアリ、然レ共往々此周圍ニ數箇乃至十數箇ノ異常細胞ガ其外側ニ平行シテ存在スルアリ或ハ群ヲナシテ其外側ニ接スルモノアリ、如斯細胞竈ハ一般

ニ他ノ部ニ於テ見ルガ如ク大ナルハ見ル事能ハズ、此異常細胞ハ上記ノ如ク其大サ、染色状態ハ著シク多種多様ナリ、一般ニ核質ニ乏シキ核ハ大ニシテ細胞體モ大ナルガ如ク、核質ニ富ムモノハ大サ稍々小ニテ細胞體自身モ小ナルガ如シ、其大ナルモノノ中ニハ著シク大ニシテ殆ド肝細胞ノ稍々小ナルモノニ近キ細胞體ヲ有スルモノアリ、或ハ又殆ド核質ニ富メル上記細胞ノミヨリナル肝細胞柱ノ間ニ存在スルモノアリ、小葉間結締織ハ一般ニ輕度増殖ヲ示シ、往々可ナリ高度ノ増殖ヲ示スモノアリ、ノミナラズ此増殖セル小葉間結締織ヨリ小葉内ニ結締織束ヲ出シ、此束ハ更ニ別レテ肝細胞ノ間ニ進入シ、爲ニ小葉ハ更ニ分割サレタル狀ヲ呈スルモノアリ、一方中心靜脈ノ周圍ニ於テ増殖セル結締織束ヨリ結締織纖維ノ小束ガ分レテ同様ニ小葉内ニ進入スルモノアルヲ見ル。

格子狀纖維ハ一般ニ稍々高度ノ増殖ヲ爲シ、殊ニ肝臟被膜下、小葉間結締織ノ部及ビ中心靜脈ニ近キ部ニ於テ激シク中央部ニ於テハ稍々其度ノ減セルガ如シ、殊ニ上記高度ニ増殖セル部分ニ在リテハ肥厚セル纖維ノ多數ヲ見、如斯纖維ハ屈曲急ニシテ所々膠樣纖維ノ如キヲ見ル事ヲ得。

強擴大。肝細胞ノ大サハ種々ニシテ其核モ亦同様ナリ、核ニハ著シク核質ニ乏シキ核質ノ殆ド一方ニ押セラレタルノ狀ヲ呈スルモノアリ、核ノ形態ハ亦細胞體ト同様ニ種々ナリ、一般ニ原形質ハ少ク甚シキハ其核ノ周圍ニ殆ド帶狀ヲ爲シテ存在シ圓形ナルアリ多稜形ナルアリ、又往々「ネクローゼ」ニ陥リテ核ノ全ク染色セザルアリ此「ネクローゼ」ニ陥レル細胞ハ屢々ニ乃至三箇集合シテ他ノ健康ナル肝細胞ノ間ニ介在スルモノアリ、或ハ又「ピクノーゼ」ニ陥リタルアリ、小葉間結締織ハ増殖シタル所ニ幼若ナル結締織細胞及ビ同時ニ Fibroblasten ヲ見ル事ヲ得、如斯小葉間結締織ヨリハ所々小葉内ニ結締織纖維束ノ進入シ此纖維束ハ其途中ニテ更ニ別レテ肝細胞柱内ニ進入ス、爲ニ肝小葉ハ更ニ小ナル分葉ニ分レタルガ如キ觀ヲ爲スモノアリ、或ハ又小葉間結締織ト聯絡ナクシテ肝細胞柱間ニ二三ノ結締織纖維ヲ見ルモノアリ、小葉間結締織モ特ニ「グイツソン氏鞘」ノ部ニ於テ發育シ此部ニ存在スル各血管、膽管ハ厚キ結締織層ヲ以テ取圍マル、爲ニ此部ハ著シク厚キ層ヲ爲ス、血管ハ餘リ著シキ充血ヲ示サズ、其内皮細胞ハ所々「ネクローゼ」ニ陥リ或ハ剝離セルヲ見ル、膽管ノ内皮細胞ハ比較的變化ナキモ往々「ピクノーゼ」ニ陥レルモノアルヲ見ル、中心靜脈ノ内皮細胞ハ屢々其形態ヲ變シ膨隆シテ腔内ニ突出セルモノアリ、此靜脈ノ周圍ニ於テモ結締織ノ増殖ヲ認ム、然レ共其増殖度ハ著シク差アリテ或レモノニ在リテハ高度ニ發育シテ厚キ層ヲナシ肝細胞ト距テラレ或レモノニ在リテハ殆ド増殖ヲ認メザルモノアリ。

小葉内肝細胞柱ノ間ニハ多數ノ赤血球ト共ニ多數ノ異常細胞ヲ有ス、其異常細胞ハ著シク多數ニ密集シ其間ニ赤血球ヲ混ズルモノアリ、或ハ毛細管ト關係ナク肝細胞ガ一方ニ押寄セラレ其間ニ存在スルモノアリ、此異常細胞ハ其種類多ク比較的大ニシト核モ稍々大ニテ核質ニ乏シキモノ、或ハ之ヨリ小ニシテ核モ小サク稍々核質ニ富ムモノアリ、此細胞中ニハ屢々「エオヂン」ニ依リテ染色サルル部分ヲ有スルモノアリ此部ノ大サ及ビ其可染度モ亦種々ナリ、或レモノハ濃度ハ淡キモ全原形質ガ殆ド染色サルルモノアリ、或ハ極メテ小ナルモ比較的染度ノ強キモノアリ、又全ク同様ナル細胞ニシテ染色サルル部分ヲ有セザルアリ、上記大ナル細胞ニ在リテハ往々異常ニ大ナルモノアリテ肝細胞ニ近キ細胞形ヲ有スルモノアリ、然レ共其核質ハ一般ニ稍々多ク、原形質ハ肝細胞ト異リ一橙灰白色ヲナスヲ以テ區別スル事ヲ得、此大ナル細胞ト上記稍々小ナル細胞トハ細胞ノ大サ及ビ其核質ノ状態ニテ區別スルモ往々此何レニ數フ可キカ判斷ニ苦シム細胞アリ、又上記細胞群中ニハ往々有核赤血球ヲ見、其他種々ノ白血球ガ即

チ大單核白血球、多核白血球、「エオチン」嗜好大單核白血球が同時ニ存在スルヲ見ル事アリ。増殖セル小葉間結締織中ニハ尙ホ多數ノ圓形細胞ノ浸潤ヲ見、同時ニ上記大ナル異常細胞が所々存在スル事アリ、尙ホ稀ニハ「プラズマ」細胞ヲ見ル此細胞ハ正常ノモノニ比シテ稍々小ニシテ屢々グリツソン氏鞘ノ附近ニ存在ス。然レ共此細胞ハ多數ニ現出セズシテ稀ニ一箇乃至二箇が上記ノ部位ニ現ハルルヲ見得ルノミ。

格子狀纖維ハ一般ニ増殖ヲ示シ著シク密ナル網ヲ形成スルアリ、然レ共一方ニ於テ比較的増殖セリトハ認メ得ルモ餘リ高度ナラザルアリ、纖維ノ狀態ハ所々肥厚ヲ示シ、屈曲稍々急ニシテ圓滑ヲ失フモノ多シ此纖維ハ中心靜脈ノ周圍、小葉間結締織ノ部位ニ於テ特ニ著シク現ル、此他ノ部分ニ於テハ如斯變化ハ比較的少ク、屢々部分的ニ細胞ヲ纏絡スル小纖維ノ少クシテ減少ヲ思ハシムル部分アリ。此小纖維ニ於テモ往々肥厚ヲ認メ又所々膠樣纖維ニ變ジタル部分ヲ見ル事ヲ得。

第四例 横〇誠〇〇 二箇月 男性。

臨牀診斷 遺傳歐毒、加答兒性肺炎。

解剖診斷。

- 一. 兩肺ノ加答兒性肺炎。
- 二. 鬱血肝。
- 三. 心筋ノ混濁。
- 四. 卵圓孔ノ開在。
- 五. 歐毒性骨軟骨炎。
- 六. 氣管枝加答兒。
- 七. 脾腫。

顯微鏡的所見。

弱擴大 小葉間結締織ノ著明ニ増殖シ、殊ニグリツソン氏鞘ノ部ニ於テ高度ニ増殖セルヲ認ム。肝小葉像ハ一般ニ小ナリ、肝細胞柱間ニ存在スル毛細管、グリツソン氏鞘内ノ血管及ビ中心靜脈ハ共ニ擴張シテ血液ヲ以テ充サル、然レ共中心靜脈ニ於テハグリツソン氏鞘内ノ血管ニ於ケルヨリ血量一般ニ稍々少キガ如シ、肝細胞柱ハ殆ド正常ノ配列ヲ爲スモ所々肝細胞ノ「ネクローゼ」ニ陥レルモノアルヲ見ル、尙ホ以上ノ肝臟固有ノ組織以外ニ到ル所核質ニ富ム圓形ノ細胞が多數ニ散在スルヲ見ル此細胞ハ所々ニ於テ大ナルモノニ在リテ十數箇ノ細胞群ヲ爲シテ肝細胞ノ間ニ存在シ此部ニ於テハ肝細胞柱ハ互ニ距テラル、此異常細胞群ノ肝小葉ノ周圍ニ存在スルモノニ在リテハ小葉間結締織ニ沿ヒテ肝細胞トノ間ニ配列シ、小葉内ニ於テ多數ニ存在スル場合ニハ肝細胞柱ニ平行シテ一ツノ細胞列ヲ形成ス、僅少ナル場合ニ於テハ所々一箇乃至數箇宛點在性ニ配列ス、中心靜脈ニ接シテ存在スル此異常細胞群ハ往々細胞竈ヲ形成シテ中心靜脈ニ接シ或ハ之ガ周圍ニ配列ス、此細胞竈ヲ形成スル細胞ハ他ノ點散性ニ存在スルモノニ在リテモ一見種々ナル細胞ヨリナルヲ知ル點在性ニ在ルモノニ於テハ一般ニ核質ニ富メル其大サニ相異ノ有レ共比較的似タル細胞ヨリナリ、竈ヲ形成スル細胞群中ニ於テハ如斯種々ノ形態ヲ爲ス核質ニ富メル細胞ガ最多量ニ存在スレ共此他ニ尙ホ比較的少數ナルモ稍々大ニテ核質ニ乏シキ原形質ニ富メル細胞ヲ有ス。小葉間結締織中ニハ核質ニ富メル圓形細胞ノ他尙ホ多數ノ上皮樣細胞ノ存在スルヲ見ル此

上皮様細胞ハ其形態比較の相類似シテ所々集團ヲ爲ス、膽管上皮ハ明カニ認ムル事ヲ得レ共上記ノ如ク此周圍ヲ圍ミテ結締織リ高度ノ發育ヲ爲シ其血管周圍ニ發育セルモノト共ニ之等ヲ取圍ミテ更ニ高度ニ發育セル結締織ヲ以テ圖マル、中心靜脈周圍ニ於テハ結締織ノ發育ハ比較的少キモ往々稍々高度ナル發育ヲ認ムル事アリ、尙ホ又此發育セル結締織ヲ圍ミテ上記異常細胞群ノ配列スルモノアリ、上記ノ如ク屢々異常細胞ハ血管周圍ニ於テ存在スルノミナラズ、血管内ニ於テモ赤血球ニ混ジテ存在スルモノアリ血管ノ擴張セル事上記ノ如クナルモ大ナル血管ノ擴張ニ比シテ毛細管ノ擴張ハ稍々少キガ如シ、上記増殖セル小葉間結締織及ビ往々存在スル中心靜脈周圍ニ増殖セル結締織層ヨリハ稀ニ極メテ小ナル結締織纖維束ガ小葉内ニ進入スルヲ見得レモ著明ナラズ。

格子狀纖維ハ其發育ハ肝臟被膜下ニ於テ又中心靜脈ノ周圍、小葉間結締織ノ附近ニ於テ稍々一様ニ増殖ヲ示シ他ノ部ニ於テモ輕度ノ増殖ハ認ムル事ヲ得、又上記被膜下、中心靜脈周圍、小葉間結締織附近ニ於テ到ル所同纖維ノ肥厚セルヲ認メ、此肥厚セル纖維ハ横ニ配列スルト同時ニ小葉内細胞柱ノ間ニモ進入スルヲ見ル。

強擴大 肝細胞ハ所々脂肪ノ沈着ヲ有スルモノアリ、其形態モ種々ニシト細胞ノ「ネクローゼ」ニ陷レルモアリ或ハ比較的核質ニ富ム幼若ナル細胞ヲ見ル事ヲ得、又「ピクノーゼ」ニ陷レル細胞ヲ稀ニ發見ス肝細胞柱間ノ毛細血管ノ稍々血量ニ富ミ、多數ノ異常細胞ヲ有ス。又小葉内ニ於テ肝細胞柱ノ間ニ屢々紡錘狀ヲ爲セル Fibroblasten ヲ見ル事ヲ得。小葉間結締織ハ一般ニ稍々高度ノ増殖ヲ示シ多數ノ幼若ナル結締織纖維及ビ Fibroblasten ノ混在スルヲ見ル、或ハ又屢々核分裂像ヲ認ム、如斯増殖セル結締織ヨリ極メテ小ナル結締織束ガ小葉内ニ其突起ヲ進入セシムルモノアリ、上記幼若ナル肝細胞ハ多ク肝小葉ノ周邊部ニ於テ見ル。異常細胞ハ到ル所ニ散在性ニ存在シ肝細胞柱ノ間ニ赤血球ト共ニ乃至三箇ノ群ヲ爲スヲ見、或ハ如斯細胞群ガ血管腔トハ無關係ニ肝細胞ニ接シテ存在シ、稍々大ナル十數箇ノ群ヲ爲スモノニ在リテハ爲ニ肝細胞ハ僅ニ一方ニ壓セラレタル狀態ヲ爲ス、如斯異常細胞群ガ毛細管内ニ存在スル場合ニハ管腔ハ殆ド之ニ依リテ閉サレタル如ク見ユ、如斯狀態ハ殊ニ中心靜脈ノ周圍ニ或ハ小葉ノ周邊ニ近ク配列シ小葉間結締織ニ依リテ界サルモノアリ。此異常細胞ハ他ノ例ニ於テ見ル如ク稍々大ニシテ透明ナル核ヲ有シ原形質ニ富メルモノト之ヨリ小ニシテ核質ニ富ミ稍々原形質ニ乏シキモノ、或ハ殆ド其形態ヲ同シクシテ其原形質ノ一部ニ「エオゲン」ニ依リテ淡ク染色サルル部ヲ有スルモノアリ、又所々ニ有核赤血球ヲ見ル事ヲ得、然レ共上記大ナル細胞ハ比較的少クシテ後者即チ稍々小ニシテ核質ニ富ムモノ多ク屢々之ノミノ細胞群ヲ形成スルモノアルヲ見ル、各種白血球ハ比較的稀ナリ、星芒細胞ハ比較的明カニ認ムル事ヲ得、其細胞體ハ核ト共ニ正常ヨリモ稍々人ナルガ如シ、異常細胞群中ニハ殆ド上記核質ニ富メル細胞ノミヨリナルモノアルト同時ニ少數ノ群ニシテ尙ホ著シク種々ナル形態ヲ爲ス細胞ノ集リタルモノアリ、又有核赤血球ニシテ其原形質ノ一部ニ「エオゲン」ニ依リテ染色セザル部分ヲ有スルモノアリ其核モ著シク小ニシテ點狀ナルアリ或ハ稍々大ニシテ幾分核質ニ乏シキモノアリ。

血管ノ内皮細胞ハ又屢々犯サレ「ネクローゼ」ニ陷レルモノアリ又剝離シテ腔内ニ游離セルモノアリ、或ハ膨脹シテ紡錘形ヲ爲シ甚シキハ殆ド圓形ニ近キ形態ヲ爲スモノアリ、膽管上皮ハ比較的ヨク保持サル、小葉間結締織中ニ所々「エオゲン」嗜好單核細胞ヲ有シ其原形質ハ橢圓形乃至ハ彗形ヲ爲ス、又稀ニ「プラスマ」細胞ヲ見ル事アリ。血管内ニハ往々大單核白血球ノ存在スルアリ、上記異常細胞ノ「エオ

ゲン」ニ染色サレル部分ヲ有スルモノニ於テ其部位が原形質中ニ斑狀ニ來レルアリ、又核ニ接シテ之ヲ圍ミテ染色サレ外側ノ染色サレザルアリ、或ハ核ノ周圍ヲ圍ミテ透明ナル一種ノ光澤アル層ヲ有スルモノアリ。

格子狀纖維ハ一般ニ稍々高度ノ増殖ヲ認ムルモ或部ニ於テハ殊ニ小葉ノ中心靜脈ト小葉間結締織トノ中間ニ相當スル部分ニ於テ増殖ヲ認メザルアリ、或ハ一部ハ増殖シテ之ニ接スル他ノ部ニ於テ其増殖度ノ減セルアリテ不規則ナリ、纖維ハ一般ニ肥厚シ屈曲モ稍々急ナルガ如シ、此狀態ハ極メテ細キ細胞ヲ纏絡セル纖維ニ於ケルヨリハ稍々太ク肝細胞柱ノ間ヲ走ル纖維ニ多シ、然レ共時ニ細胞ヲ纏絡スル細纖維ニ於テ稍々著明ナル肥厚ヲ見ルコトヲ得、又膠様化セル部分ヲ到ル所ニ見、殊ニ肝臟被膜下、中心靜脈ノ周圍、小葉間結締織ノ附近ニ於テ屢々見ル事ヲ得。

第五例 松〇ア〇 十箇月十九日 女性。

臨牀診斷 遠傳敗毒、加答兒性肺炎。

解剖診斷

- 一. 加答兒性肺炎 (兩側)。
- 二. 肝臟ノ脂肪變性。
- 三. 脾臟肥大。
- 四. 敗毒性骨軟骨炎。
- 五. 心外膜、兩肺及ヒ肝臟ニ於ケル小出血。
- 六. 濃漏眼。
- 七. 口圍ニ於ケル皮膚裂瘡。
- 八. 兩腋窩ニ於ケル擦割。

顯微鏡的所見

病擴大 小葉間結締織及ヒ中心靜脈周圍ニ於テ輕度ニ結締織ノ増殖ヲ爲シ殊ニケリツソン氏鞘ノ部分ニ於テ稍々著明ニ發育シ、之等ノ増殖セル結締織束ヨリ屢々肝小葉内ニ放射狀ニ結締織纖維ノ小束ヲ送ルモノアリ、然レ共此纖維束ハ小葉ノ中央迄至ラズシテ肝細胞内ニ終ル、上記ケリツソン氏鞘ノ部ニ於ケル結締織ノ發育狀態ヲ見ルニ各血管ノ周圍及ヒ膽管周圍ヲ輪狀ニ圍ミテ増殖シ 更ニ之等ヲ共ニ圍ミテ其外側ニ異常ノ發育ヲ爲ス、肝細胞柱ハ一般ニ正常ノ配列ヲ爲スモ屢々稍々不規則トナル部分ノ存在スルヲ見ル、中心靜脈ハ輕度ノ擴張ヲ示スモ血量ハ比較的多カラズ、小葉内肝細胞柱ノ間ニ存スル毛細血管ハ輕度ノ充血ヲ示シ、爲ニ肝細胞柱ハ稍々互ニ距テラレタル狀ヲ爲ス、小葉内ノ各細胞柱ノ間及ヒ葉間結締織中ニ各種ナル大サヲ呈スル圓形ノ細胞ガ散在性ニ存在シ、其細胞ハ大サニ於テ種々ナルノ間ナラズ、其核ノ形態及ヒ核質ノ多少等著シク多様ナリ此細胞ハ二三箇乃至十數箇ノ群ヲナセドモ左程大ナル籠ハ本例ニ於テハ殆ド見ル事ヲ得ズ、如斯細胞群ハ往々肝細胞柱ヲ一方ニ押寄セテ籠ヲ爲シ、爲ニ肝細胞柱ハ稍々不規則ナル配列ヲ示スモノアリ、此細胞群ハ一般ニ比較的小葉ノ周邊部ニ近シ或ハ又中心靜脈ノ周圍部ニ於テ存在スルモノ多ク、群ヲ爲サズシテ散在性ニ來ルモノニ於テモ亦此傾向ヲ有ス、肝細胞柱ノ間ニ於テハ又上記異常細胞ニヨリテ充サレ肝細胞核ニ平行シテ異常細胞層ヲ形成スルモノ

ノアリ、或ハ又此異常細胞ノ著シク多量ニ密ニ存在スル場合ニ於テハ肝細胞柱ハ一見異常細胞群中ヲ走ルガ如キ觀ヲ呈スルモノアリ、或ハ又上記群ヲ爲スモノノ中ニ多數ノ赤血球ヲ混ズルアリ或ハ異常細胞群ノ外側ニ赤血球ノ配列ヲ見ルモノアリ。

毛細血管ハ一般ニ充血ヲ呈スル事上記ノ如クナルモ、部分的ニ差ヲ有シ、アル小葉ニ於テハ特ニ著シキ充血ヲ示スモ他ノ小葉ニ於テハ充血ヲ見ザルアリ、或ハ同一小葉内ニ於テモ一部ニ於テ強度ニ充血ヲ呈シ之ニ隣接シテ其度ノ著シク減ジタルモノアリテ一様ナラズ、血管内ニモ上記異常細胞ヲ認ムル事ヲ得ルモ之ニ於テモ著シク多數ヲ有シ全血球ノ三分ノ一ハ異常細胞ナルモノアリ、然ルニ一方ニ於テハ著シク少クシテ乃至二箇ノミ有スルアリ、或ハ全然見ザルアリ。此傾向ハ殊ニ門脈枝時ニ中心靜脈ニ於テモ見ラル。グリツソン氏鞘内ノ血管モ一般ニ稍々擴張ス、膽管ハ正常ナルモ屢々壓迫ヲ受ケテ異常ノ形態ヲ爲スモノアリ、上記増殖セル小葉間結締織内ニ於テモ亦多數ノ種々ナル圓形ノ細胞ノ浸潤スルヲ認ム。

格子狀纖維ハ肝臟被膜下及ビ中心靜脈ノ圍周、小葉間結締織部ニ於テ稍々強度ノ増殖ヲ示スト共ニ稍著シキ肥厚ヲ爲ス、殊ニ中心靜脈ヲ取圍ムモノハ其經過甚ダ不規則ナリ、小葉ノ中央部ニ於テモ一般ニ増殖ヲ認ムルモ上記諸部位ニ劣レリ、且纖維自身モ同様ニ肥厚纖維ハ同部ニ於ケルガ如ク多數ニ見ルコトヲ得ズ。

強擴大. 肝細胞ハ其形態比較的正常ナルモ多數ノ細胞、脂肪ノ浸潤ヲ有シ、又所々「ピクノーゼ」或ハ「ネクローゼ」ニ陥レルモノアリ、一箇ノ肝細胞中ニ稍々小ナル正常ノ形態ヲ有スル二箇ノ核ヲ有スルモノアリ、核ハ正常ナルカ稍々核質ニ富ミ其原形質ノ比較の僅少ナル細胞アリ、如斯細胞ハ一般ニ圓形ナルカ橢圓形ナリ、或ハ核モ共ニ稍々小ナルモノアリ、肝細胞柱ノ配列ハ尙ホ多少不規則ニシテ、細胞柱ノ間ガ互ニ膨狀ニ擴大シ其間ヲ血液及ビ異常細胞群ニ依リテ充タサルモノアリ。肝細胞柱ノ間ニ存在スル毛細血管ハ一般ニ血量ニ富ム、中心靜脈ハ一般ニ比較的血量ニ乏シク、内皮細胞ハ往々膨隆シテ管腔内ニ突出スルモノアリ、或ハ剝脱セルモノアリ、其周圍ハ屢々結締織ノ増殖ヲ認ムレ共又殆ド増殖ヲ認メザルモノアリ。小葉間結締織ハ同様稍々増殖シ多數ノ幼若ナル結締織纖維及ビ Fibroblasten ヲ見ル、殊ニ如斯細胞ハグリツソン氏鞘内又ハ此附近ニ於テ多數ニ現ル、如斯幼若ナル結締織纖維ハ屢々肝小葉内ニ肝細胞柱ノ間ニ進入スルヲ見ル、上記小葉間結締織殊ニグリツソン氏鞘附近ニ於テ稀ニ「プラスマ」細胞ヲ見ル事アリ又淋巴球ノ浸潤ヲ認ム、小葉内ニ存在スル異常細胞ハ比較的大ナル透明ナル核質ニ乏シキ核ヲ有シ稍々原形質ニ富メル細胞アリ、又此細胞ヨリ稍々小ニシテ核質ニ富メル核ヲ有シ稍々原形質ニ乏シキ細胞アリ、此細胞ト殆ド同形ニシテ或ハ稍々小ナル細胞ニテ其原形質ノ一部ニ「エオゲン」ニ染色スル部分ヲ有スルモノアリ、其「エオゲン」ニテ染色サルル部分ハ大ナルアリ極メテ小ナルアリ染色度ノ強キアリ弱キアリ一様ナラズ、或ハ原形質ノ一部ニ染色セザル一種ノ光澤ヲ有スルモノアリ。如斯細胞ハ二乃至三箇群ヲ爲シ、赤血球及ビ單核或ハ多核白血球ト共ニ肝細胞柱ノ間ニ存在シ、殊ニ小葉間結締織ノ附近ニ多數ニ存在ス、上記大ナル細胞ハ屢々小葉間結締織ノ間ニモ亦見ル事ヲ得、又如斯細胞中ニハ核ガ三乃至四箇ニ別レ顆粒トシテ散在性ニ細胞内ニ有スルモノアリ、或ハ前記大ナル細胞ニテ核ノ比較的大ニシテ原形質ノ乏シキモノ、又逆ニ核ハ稍々小ニシテ原形質ノ多キモノ、核ノ核質ニ富ミ原形質モ相當ニ有スル細胞ニシテ其原形質ガ全テ「エオゲン」ニ染色スルモノアリ、又上記大ナル細胞ニ

於テ屢々核分裂像ヲ見、或ハ又已ニ「ネクローゼ」ニ陥レルモノアルヲ見ル、門脉枝ノ内皮細胞ガ異常ニ膨隆セルアリ、或ハ「ネクローゼ」ニ陥レルアリ、其管腔内ニ多數ノ多核白血球及ビ上記セル異常細胞ヲ同時ニ含有ス、膽管上皮ニ於テハ殆ド變化ヲ認ムル事ヲ得ズ、尙ホ本例ニ於テハ「エオザン」嗜好細胞ハ著シク僅少ナリ、尙ホ上記ノ異常細胞群ハ多ク小葉間結締織ニ沿ヒテ存在スルカ、或ハ中心靜脉周圍ニモ群集スル場合アリ、中間ニ位スル部分ニ於テノ細胞ハ散在性ニ來ルモノ多ク、群ヲ爲スモノニ在リテモ極々テ小ナル群ヲ爲セルヲ見ルノミ。

格子狀纖維ハ一般ニ増殖ヲ示ス、然レ共一方ニ於テハ屢々減少セル部ヲ見ル、殊ニ小葉ノ中心靜脉ト小葉間結締織トノ中間層ヲ爲ス部ニ於テ屢々存在ス、其増殖ハ主トシテ肝臟被膜下、中心靜脉周圍、小葉間結締織ノ部分ニ於テ甚シク、同時ニ著シキ肥厚ヲ認ム、此部ニ於ケル肥厚セル纖維ハ小葉内ヲ肝細胞柱ニ沿ヒテ走ルモノアリ、尙ホ到ル所膠樣纖維ニ變セルモノヲ認ム、小葉内ニ於テ肝細胞ヲ纏絡セルモノニ於テモ、同様ニ到ル所肥厚セルヲ認ムル事ヲ得、其屈曲ノ狀態モ一般ニ屈曲急ニシテ殊ニ上記肥厚セル纖維ニ於テ甚ダシク一見枯レタル樹枝ヲ見ルガ如シ、極メテ纖細ナル纖維ニ於テハ同様所々ニ肥厚ヲ認ムル事ヲ得ルモ他ノ變化ハ比較的少キガ如シ。

第六例 高〇=〇 二箇月 女性。

臨牀診斷 遺傳敝毒。

解剖診斷。

- 一、兩肺ノ鬱血、浮腫。
- 二、心筋ノ混濁。
- 三、腎臟ノ實質炎。
- 四、鬱血肝。
- 五、敝毒性骨軟骨炎。
- 六、脾腫。
- 七、腦水腫。
- 八、氣管枝加答兒。

顯微鏡的所見。

弱擴大 肝臟小葉間結締織及ビ中心靜脉周圍ニ於テ稍々高度ノ結締織ノ増殖ヲ示シ、殊ニ中心靜脉周圍ニ於テハ上記ノ如ク一般ニ増殖ヲ示スモ時ニ殆ド増殖ヲ認メ得ザルモノアリ、増殖セル小葉間結締織及ビ中心靜脉周圍ヨリノ小葉内ニ所々小ナル結締織纖維束ヲ放線狀ニ進入セシムルモノアリ、小葉間結締織中ニ於テモ殊ニケリツソン氏鞘及ビ此附近ニ於テ結締織ノ増殖甚ダシ、小葉像ハ正常ナリ、肝小葉内細胞柱ノ配列ハ比較的變化少シ、肝細胞柱ノ間ニハ又到ル所多數ノ異常細胞ガ散在性ニ存在シ、所々群ヲ爲スモノアルモ時ニ小葉内ニ如斯細胞ヲ全然見ザルモノアリ、上記群ヲ爲スモノニ在リテハ時ニ比較的多數ノ群ヲ爲スモノアルモ一般ニ極メテ少數ニテ僅十箇ニ足ラザル細胞ニ依リテ形成サルモノ多シ、又肝細胞柱間ノ毛細管ハ一般ニ擴張シ多數ノ赤血球ニ混ジテ存在スルモノアリ、此小群・肝小葉ノ部分ニ關ヘズシテ多ク肝細胞柱間ノ毛細管内ニ在リテ之ヲ充タスモノアリ、又稀ニハ小葉間結締織ニ接

シテ存在スルモノアリ、其異常細胞ハ種々ニシテ他ノ例ニ於ケルガ如キ大ナル細胞ハ比較の少數ニシテ其大部ヲナスハ核質ニ富メル稍々小ナル細胞ナリ、如斯細胞ニ於テモ亦其大サ種々ナリ。此細胞ノ小群ヲ爲スモノハ中心靜脈ノ周圍ニ於テハ極メテ僅少ニシテ、小葉間結締織ニ接スル部分ニ於テ比較的多キガ如シ、小葉間結締織ニ於テモ亦核質ニ富メル圓形ナル多數ノ細胞ノ浸潤アリ此細胞ノ結締織中ニ散在性ニ存在スレ共、往々一部ニ多數ノ細胞ガ密集リ、他ノ部分ニ於テハ全ク見ザルモノアリ、小葉内ニ於テ稀ニ存在スル比較の大ナル異常細胞群ノ部ニ在リテハ肝細胞柱ヲ局部的ニ一方ニ押寄せ、異常細胞群ハ橢圓形ヲ爲シテ一見肝細胞柱ガ此細胞群ヲ外方ヨリ取圍メル状態ヲ爲スモノアリ、如斯細胞群ハ一般ニ上記ノ如ク種々ナル形態ノ細胞ヨリ成ルモ屢々殆ド同一ナル細胞ヨリ成ル群ヲ見ル事ヲ得、而シテ此細胞ノ異同ハ其窠ノ大サニ關係セズシテ、大ナルモノニテ殆ド同一ナル細胞ヨリ成レルアリ、小ニシテ多樣ノ細胞ヨリ成レルモノアリ。小葉間結締織中ニ存在スル圓形ナル細胞群ハ殊ニクリツソン氏鞘ノ附近ニ多ク、時ニ小葉間結締織ノ經過ト同一方向ニ多數ノ同細胞ガ帶狀ニ密集スルモノアルヲ見ル、肝動脈枝ニ於テモ、門脈枝、中心靜脈ニ於テモ血管腔ハ比較の擴張スルモ血球ノ含量一般ニ極メテ少シ。

格子狀纖維ハ一般ニ肝臟被膜下、中心靜脈ノ周圍、小葉間結締織附近ニ於テ殊ニ高度ノ増殖ヲ示スモ如斯部位ニ於テスラ其發育度ニ差ヲ有ス、又此部ノ纖維ハ一般ニ肥厚セルモノ多ク此肥厚セル纖維ハ到ル所小葉内ニ進入ス、而モ其屈曲ハ大ニシテ急ナリ、小葉内ニ於テ中心靜脈ト小葉間結締織トノ中間部ニ位スル部ニ於テハ或部ニ於テハ高度ニ細纖維ノ密ナル網ヲ見レ共、他ノ部ニ於テハ全ク見ザルアリ、或ハ如斯部ニ於テモ所々部分的ニ纖維網ヲ見ルモノアリ、中心靜脈ノ周圍、小葉間結締織ノ部ニ於テハ上記肥厚セル纖維多數ニ存在シ其之等ニ沿ヒテ走ル纖維網ハ其厚サヲ増ス。

強擴大 肝細胞ハ比較のヨク保持サレ僅ニ所々脂肪ノ浸潤ヲ有ス、又「ネクロゼ」ニ陥レルモノヲモ見ル事ヲ得、小葉間結締織ハ増殖シ到ル所幼若ナル結締織纖維及ビ Fibroblasten ヲ認ムル事ヲ得、殊ニクリツソン氏鞘ノ部ニ於テ高度ニシテ血管ノ周圍ニ於テ古キ結締織ノ周圍ニ於テ上記幼若ナル結締織纖維層ヲ以テ圍マルモノアルヲ見ル、又所々如斯幼若ナル結締織纖維ノ小束ガ肝細胞柱ノ間ヲ走リテ肝小葉内ニ進入スルモノアリ、中心靜脈周圍ニ於テモ亦高度ニ増殖シ或部ニ於テハ可ナリ厚キ層ヲ形成シ此層ヨリ肝小葉内ニ向ヒテ多數ノ突起ヲ出シ肝細胞柱ノ間ヲ走ルモノアリ、然ルニ一方ニ於テハ中心靜脈ノ周圍ニ於テ殆ド結締織ノ増殖ヲ見ザルモノアリ、肝細胞柱ノ間ハ一般ニ高度ニ赤血球ヲ以テ充サルルモアル小葉ニ於テハ充血ヲ殆ド見ザルモノアリテ著シク不規則ナリ、此充血セル毛細管ノ赤血球ノ内ニハ尙ホ多數ノ異常細胞ヲ有ス、此異常細胞ハ赤血球ヨリ遙ニ大ニシテ核質ニ富メル核ヲ有シ比較的原形質ニ富ム、此細胞ノアルモノハ其原形質内ニ「エオゲン」ニ依リテ染色サルル部分ヲ有スルアリ、其部分ハ極メテ小ナル斑狀ノモノアリ、大ナルハ殆ド原形質ノ全テガ染色サル、此染色度モ種々ニシテ極メテ濃厚ニ染色スルモノアルモ一般ニ淡ク染色サルルモノ多シ、濃度強キモノニ在リテハ細胞體及ビ核ハ稍々小ナルガ如シ、如斯細胞ニ混シテ此細胞ヨリ一般ニ大ニシテ其大サ種々ナル稍々核質ニ乏シキ細胞アリ、此細胞ノ特ニ大ナルモノハ殆ド肝細胞ノ小ナルモノニ近キモノアリ、然レ共肝細胞ヨリハ其原形質遙ニ少クシテ核ハ核質ニ富ミ原形質ノ染色状態ヲ異ニス。此他尙ホ稀ニ有核赤血球ヲ認ム、此有核赤血球中ニハ其核著シク小ニシテ赤血球ノ一部ニ黑點ヲ有スルガ如キモノアリ、此他屢々「エオゲン」嗜好單核細胞、多核白血球大單核白血球ノ存在スルヲ見ル、上記各種ノ細胞ハ肝細胞柱ノ間ニ赤血球ト混

在シテ存在スルモ、アル部ニ於テ、此異常細胞ノミガ一箇ノ群ヲ爲シテ毛細管トハ關係ナクシテ肝細胞ノ間ニ介在シ、小葉ノ周圍部ニ於テ、小葉間結締織ニ沿ヒテ肝小葉ノ内側ニ並ブモノアリ、如斯群ニ於テノ往々小ナル圓形ヲ形成スルモ又ニ乃至三箇宛小葉間結締織ニ沿ヒテ存在スルモノアリ。小葉間結締織内ニ於テハ又屢々「エオゲン」嗜好單核細胞ヲ有ス此細胞ハ形圓ヲ爲スアリ又菱形ヲ爲スアリ多様ノ形態ヲ爲シ多數ノ「エオゲン」ニ濃染スル顆粒ヲ有ス、此他多數ノ Fibroblasten アリ又稀ニ「プラスマ」細胞ノ存在スルアリ。肝細胞ノ間ニハ稀ニ多數ノ核質ニ富メル大ナル核ヲ有スル巨大細胞ヲ見ル事アリ。血管ノ内皮細胞ハ屢々剝離シテ血管腔内ニ遊離シ、或、膨隆シ核モ大トナリ橢圓形ヲ爲シテ血管腔内ニ隆起スルモノアリ、或ハ稀ニ「ネクローゼ」ニ陥レルヲ見ル事アリ。血管ハ一般ニ血量ニ乏シキモ時ニ著シク血量ニ富メルモノアリ、中心靜脈ニ於テハ如斯ノ極メテ少シ。血管内ニ於テモ赤血球ノ他上記核質ニ富ム各種ノ異常細胞ガ他ノ種々ナル白血球ト共ニ混在スルヲ見ル。膽管ハ其内皮細胞ハ比較的ヨク保持サレ稀ニ其剝離セルヲ見、其周圍ニ於テモ血管ト同様増殖セル結締織層ニ依リテ圍繞サル。

格子狀纖維ハ肝臟被膜下ニ於テ高度ニ發育シ、中心靜脈周圍ニ於テモ同様ナリ、中心靜脈ヲ圍ムモノハ正常ノモノニ比シテ肥厚セル纖維甚ダク纖維ノ走行鬆疎ニシテ纖維ノ幅廣シ且其屈曲急ナリ、肝臟被膜下ニ於ケルモノニ於テモ略々同様ナル性質ヲ有ス、小葉内ニ於テハ其部位ニ依リテ異リ周圍部ニ於テハ一般ニ著シク増殖ヲ示シ、上記ト同様ノ性質ヲ有ス、中央ニ近ヅクニ從ヒテ或部ニ於テノ増殖セザルカ殆ド見ザル部分アリ、然レ尙ホ高度ノ増殖ヲ示スモノアリ、此部ニ於テノ纖維ハ一方肝細胞ヲ密ニ取圍ミ、尙ホ他方其部ノ毛細管ヲ同様ニ圍繞ス、此狀態モ一部ニ於テハ著シク密ニ他ノ部ニ於テハ比較的鬆疎ナリ、此細纖維中ニ於テモ亦肥厚セル纖維ガ多數ニ存在シ、爲ニ同一細胞ヲ圍ム纖維ニシテ甚シク不規則ナル狀態ヲ爲ス、一方肝細胞柱ニ沿ヒテ走ルモノニ於テハ肥厚セルモノ甚ダク、其屈曲モ急ニシテ著シク圓滑ヲ失フモノ多ク、尙ホ上記肥厚セル中ニハ膠樣纖維ニ化セルモノヲ到ル所ニ見ル事ヲ得。

四 結締織纖維ノ増殖ニ就テ

文 獻

遺傳微毒ニ依リテ肝臟ニ結締織纖維ノ異常増殖ヲ來ス事ニ就キテハ 1863 年ニ Wilks¹³⁵⁾ 氏ガ已ニ記載シ、殆ド同時代ニ Wagner¹²⁹⁾ 氏ハ微毒ニ依リテ肝臟ニ汎發性炎症ノ來ルヲ云ヒ之ヲ汎發性微毒腫 Diffuse Syphilom ナリト云ヘリ。

Gubler³⁵⁾ 氏ハ肝臟ニ於ケル微毒性炎症ヲ記シ、其主要ナル變化ハ纖維形成性細胞及ビ多少長形ヲ爲ス細胞ノ現出ナリトシ、且之ヲ二種ノ型ニ區別シーヲ全部型トシ他ヲ局部型ト爲シ、其全部型ハ即チ肝臟實質ノ硬變ヲ來スモノナリトシ、同時ニ漿膜炎ニ參與シ、血管ハ往々閉鎖スルモノアリト云フ。

Howitz⁵⁰⁾ 氏モ亦略々同様ナル所見ヲ記載セリ。

Virchow¹²⁷⁾ 氏ハ已ニ 1858 年ニ出産後直ニ死亡セル小兒ニ於テ硬キ細顆粒ヲ

有スル肝臟ヲ見テ之ハ微毒ニ依リテ來レルモノナルヲ云ヒ、

Meyer⁷⁷⁾ 氏ハ生後四箇月半ノ女兒ヲ解剖シ微毒性汎發性肝臟間質炎ヲ有セルヲ報告シ、

Hutinel u. Hudelo⁶¹⁾ 氏ハ 1890 年ニ胎兒及ビ初生兒ノ肝臟微毒ヲ研究シテ之ヲ三ツノ時期ニ區別セリ、一ハ充血及ビ鬱血期ニシテ、二ハ出血及ビ浸潤期ニテ、三ハ汎發性硬變期ナリト爲シ其結締織ノ狀態ヲ記載シテ門脈周圍ノ結締織ハ著シク増加シ小葉間及ビ小葉内ニモ同時ニ來リ互ニ明カナル境界ナシニ他ノモノニ移行ス、モシ更ニ増殖スル場合ニハ遂ニ汎發性硬變ヲ來スニ至リ遂ニハ肝臟實質ハ消失シ、核ニ乏シキ纖維性結締織ノ多少硬固ナル束ニ置換サレ、同時ニ血管鞘ハ肥厚シ、殊ニ門脈系統來リ、所々管腔ガ閉鎖サルルニ至ルト云フ、

Förster,³³⁾ Baumler¹⁰⁾ 氏等ハ遺傳微毒ノ肝臟ニ於ケル間質ノ増殖ハ常ニ血管壁ヨリ來ルト云ヒ、

Hecker³⁸⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル結締織ノ増殖ハ汎發性ニ來ルモノアリ、小葉内ニ又ハグリッソン氏鞘、膽管ノ周圍ニ局限性ニ來ルモノアリ、而シテ何故アルモノハ小葉内ニ來リ他ノモノハ常ニ小葉間ニ來リ或ハ門脈周圍組織ニ來ルカハ不明ナリト云フ、

Tobeitz¹¹⁹⁾ 氏ハ生後七週ノ微毒性小兒ニ於テ肝臟内ニ汎發性ノ細胞浸潤ト共ニ小葉間及ビ小葉内ニ於テ特ニ血管周圍ニ於テ結締織ガ著シク増殖セルヲ記シ氏モ亦肝臟間質ノ増殖ハ血管壁ト關係アルヲ云フ、

Hessler⁴³⁾ 氏ハキールノ病理研究室ヨリ微毒ニ依リテ肝臟組織ハ全ク肝硬變症ヲ來スヲ發表シ、

Tonkow¹²²⁾ 氏ハ遺傳微毒ヲ有スル十一歳ノ少女ニ肝臟硬變症ヲ有スルヲ見、此肝臟ニ於ケル結締織ノ増加ハ竈狀ニ來レルヲ記載セリ、

Hochsinger⁴⁶⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ヲ四ニ區別シ、一ハ浸潤ノ高度ナルモノ、二ハ結締織ノ増殖ノ高度ナルモノ、三ハ粟粒護謨腫ヲ爲スモノ、四ハ眞性結節性護謨腫ヲ有スルモノトナシ、其結締織ノ増殖ヲ爲スモノハ血管周圍ニ於テ高度ニ増殖シ、之ヨリ肝小葉内ニ進入スト云フ、

Marchand⁷⁰⁾ 氏ハ 1896 年ニ雙胎兒ノ遺傳微毒ヲ解剖シタルニ一方ノ肝臟ニ於テハ已ニ肉眼ノ高度ノ變化ヲ爲シ、他ノ肝臟ニ於テハ存在セザルヲ報告シ、成人ニ來ル眞性肥大性肝硬變症ハ此汎發性微毒性肝間質炎ト何等カ關係ヲ有ス

ルニ非ズヤヲ云フ。

Machat⁶⁸⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ヲ精細ニ研究シ、結締織ト肝臟實質ノ變化ニ就キ記述シ遺傳微毒ニ於テ微毒性硬變症ヲ來スハ稀ニ見ル事ヲ得ルヲ云ヒ、

Winogradow¹³⁷⁾ 氏ハ初生兒ノ肥大性微毒性肝硬變症ヲ精細ニ檢索シ、此結締織ノ増殖ハ確ニ小ナル膽管ニ從ヒテ發育スルモノナルヲ云フ。

Clarke²⁰⁾ 氏モ遺傳微毒ニ依ル肝硬變症ノ二例ニ就キテ研究シ、結締織ノ増殖ハ常ニ毛細管ニ沿ヒテ行ハレ同時ニ肝細胞ハ萎縮ニ陥ルヲ云ヒ、

Hochsinger¹⁴⁴⁾ 氏ハ 1898 年ニ前ノ研究ニ附加シテ小葉内ニ於テモ結締織ノ増殖スルヲ確定シ、

Hecker²⁶⁾ 氏ハ遺傳微毒ニ依ル肝臟硬變症ト同時ニ特ニ肝細胞ノ變化ヲ來スヲ云フ。

Oberndorfer⁸²⁾ 氏ハ遺傳微毒ニ於テ肥大性ノ肝硬變症ノ來ルヲ主張シ、

Fischer⁸⁰⁾ 氏ハ遺傳微毒ニ依リテ肝硬變症ノ來ルヲ云ヒ、同時ニ肝細胞間ニ結締織ノ發育ヲ來シ、膽管ノ中等度ノ増殖、再生ノ意味ニ於ケル肝細胞ノ變化ヲ現出シ、新生サレタル結締織ハ彈力纖維ニ富ムト云フ。

Baumgarten⁹⁾ 氏ハ小葉内及ビ小葉間纖維性肝臟炎ノ來ルヲ云ヒ、

Müller⁸⁰⁾ 氏ハ十八例ノ遺傳微毒兒ヲ檢索シ十一例ニ於テ肝臟ヲ犯サレ、九例ニ於テハ只肥大セルノミナリシヲ云フ。

Ballantayne⁷⁾ 氏ハ肝臟ノ小葉間及ビ門脈ヲ圍ム結締織ガ高度ノ増殖ヲ示シ、肝細胞ハ顆粒狀ニ變ジタル例ヲ報告シ、

Schukowsky,¹⁰⁾ Beck,¹¹⁾ Chiari¹⁹⁾ 氏等モ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ硬變狀ノ高度ノ結締織ノ増殖ノ來ルヲ云フ。

Schott¹⁰⁶⁾ 氏ハ特ニ血管壁ガ増殖セル結締織纖維ニヨリテ高度ニ肥厚セルヲ記載シ、

Birch-Hirschfeld¹²⁾ 氏ハ小葉内ニ結締織ノ高度ニ増殖スルガ爲メニ肉眼的ニ小ナル灰色乃至黃白色ノ點狀トシテ現レ、大ナル門脈枝ヲ取圍ム結締織モ高度ニ發育シ、同様ニ又肝臟被膜モ屢々慢性腹膜炎ノ狀ヲ呈スト云フ。

Schüppel¹¹⁰⁾ 及ビ Hintzen⁴⁶⁾ 氏モ門脈ノ分枝ニ沿ヒテ著シキ結締織ノ増殖ヲ來スヲ云ヒ、之ヲ纖維性門脈周圍炎 Peripylephlebitis fibrosa ト稱セリ。

Chiari¹⁹⁾ 及ビ Beck¹¹⁾ 氏ハ遺傳微毒ニ依ル肝臟ノ變化ハ謾腫性膽道炎ノ型ニ

シテ、此膽道周圍ノ結締織ノ肥厚ハ稍々護謨腫性新生物ノ性質ヲ有シ、門脈周圍組織ハ大ナル膽管ノ壁ヨリ如斯變化ハ一般ニ僅少ナリト云フ。

Erdmann²⁷⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テアルモノニ在リテハ高度ノ結締織ノ増殖ヲ認ムルモ、他ノモノニ於テハ血管周圍等ニ於ケル増殖ハ殆ド認メザルモノアリト云フ。

Werdt¹³³⁾ 氏ニ依レバ、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル結締織ノ増殖ハ常ニ必ズシモ存在スルモノニ非ズシテ、屢々何等異常増殖ヲ見ザルモノアルヲ記載セリ。

考 按

上記文獻ヲ通覽スルニ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テ結締織ガ異常ニ増殖ヲ來ス事アルハ明カニシテ其増殖ノ來ル部位ニ就キテ種々論議サル即小葉間結締織ガ著シキ増殖ヲ來スト爲スモノ (Meyer,⁷⁷⁾ Förster,³³⁾ Baumler,¹⁰⁾ Hochsinger,⁴⁸⁾ Clarke,²⁰⁾ Baumgarten,⁹⁾ Ballantayne,⁷⁾ Schott¹⁰⁶⁾ u. s. w.) 或ハ葉内ニ結締織ガ異常發育ヲ爲スヲ云フモノ (Fischer³⁰⁾ u. s. w.) 小葉間結締織ノ異常増殖ト同時ニ小葉内ニ異常ニ發育ヲ爲スモノ (Hutinel u. Hudelo,⁵¹⁾ Hecker,³⁸⁾ Tobeitz,¹¹⁹⁾ Birch-Hirschfeld¹²⁾ u. s. w.) 主トシテ膽管周圍ニ來ルト爲スモノ (Winogradow¹³⁷⁾ u. s. w.) 主トシテ門脈枝ノ周圍ニ來ルト爲スモノ (Birch-Hirschfeld,¹²⁾ Hintzen⁴⁶⁾ u. s. w.) 等アリ。然ルニ一方 Erdmann²⁷⁾ 氏ノ例ニ於テ又 Werdt¹³³⁾ 氏ノ例ニ於テ他ノ遺傳微毒ニ依ル變化ヲ明カニ見得ルモ、結締織ノ増殖ハ之ヲ見ザルモノ多キヲ云フ。吾人ノ六例ニ於テ見ルニ、第二例ハ最モ高度ナル遺傳微毒ニ依ル硬變ヲ呈シ (第一圖) 結締織ノ増殖著シク高度ニシテ肝細胞ノ正常ノ配列ヲ見ルヲ得ズ、他ノ五例ニ於テハ肝小葉像明カニシテ、尙ホ其小葉間結締織ノ増殖ハ著シキモ第五例ニ於テハ弱擴大ニ依リテハ一見殆ド増殖ヲ認メ難キガ如キモノアリ。然レ共同例ニ於テモ精細ニ檢索スル時ハ其程度ハ著シク弱キモ明カニ増殖ヲ認ムル事ヲ得、殊ニグリッソン氏鞘ノ部ニ於テ稍々著明ナリ。高度ニ發育ヒルモノニ在リテハ其層ハ可ナリ高度ニ其幅ヲ増スト共ニ尙ホ多數ノ幼若ナル結締織纖維ヲ見ル事ヲ得 (第三圖)。尙ホ小葉内ニ於ケル増殖ハ上記各例ニ於ケル顯微鏡的所見ニ於テ見ルガ如ク屢々太キ結締織纖維束ガ小葉内ヲ走り小葉間結締織ニ至リテ之ニ移行スルモノヲ見ル (第二圖)。如斯太キモノヲ見ザルモノ、即チ弱擴大ニ於テ一見見ル事ヲ得サルモノニ在リテモ強擴大ニ依リテ精細ニ檢索スル時ハ屢々

小葉内ニ於テ、殊ニ肝細胞柱ニ沿ヒテ走ル極メテ細キ纖維乃至ハ纖維束ヲ見ル事ヲ得ルト共ニ同時ニ又 Fibroblasten ヲ見ル事ヲ得(第六圖)。或ハ中心靜脈周圍ニ於テ強度ノ増殖ヲ示シ之ヨリ肝小葉内ニ多數ノ結締織纖維束ガ放線狀ニ進入スル狀ヲ見ル事ヲ得ル(第四圖)等ノ事實ヨリ吾人ハ上記セル如ク Eadmann²⁷⁾ 氏及ビ Werdt¹³³⁾ 氏ハ氏等ノ例ニ於テ結締織ノ増殖ハ發見セズト云ヒタルモ、吾人ハ吾人ノ例ニ於ケル所見ヨリ必ズ其結締織ノ發育ハ其程度ノ強弱、或ハ纖維ノ老若ハ存在ストモ殆ド全テノ場合ニ増殖ヲ來スモノナル可シト信ズルモノナリ。而シテ遺傳微毒ニ依リテ來タル肝臟硬變ハ今日殆ド全テノ學者ニ依リテ固有ノ肝臟硬變症トハ全然別種ノモノト爲シ肝臟微毒ナル特別ナル條下ニ記載サル、然レ共上記ノ如ク其結締織ノ發育ノ稍々輕度ナルモノニ於ケル所見ハ殊ニ第三例、第六例ノ如キハ現今 Hanot 氏ノ肝硬變症トシテ記載サルモノニ著シク類似ス。已ニ上記文獻中ニ於テ見ルガ如ク Marchand⁷⁰⁾ 氏ガ成人ニ來ル眞性肥大性肝臟硬變症ト何等カ關係ヲ有スルモノニ非ラズヤト云ヘルハ興味アル事ニシテ、吾人ハ少クとも遺傳微毒ニ於ケル結締織ノ異常増殖ハ Hanot 氏ノ肝臟硬變症ト同一ナル状態ニ於テ發育スルモノナルヲ云ハントス。而シテ更ニ此事ヨリ元來 Hanot 氏ノ肝臟硬變症ガ其原因ノ明カナラザル今日、コレマデ Hanot 氏ノ肝臟硬變症トシテ記載サレタルモノノ中ニハ如斯原因ニ依リテ招致サレタルモノモアルニ非ラズヤヲ考ヘシムルモノナリ。

尙ホ小葉間結締織ニ於テ増殖セル結締織ガ此部ノ血管ト關係ヲ有スト爲スモノト膽管ト關係ヲ有スト爲スモノアル事上記ノ如クナルモ、吾人ハ顯微鏡的所見ニ於テ記セルガ如ク、此何レノ周圍ニモ結締織ノ増殖ヲ認ムルモ、血管ノ周圍、殊ニ門脈枝ノ周圍ニ於テ稍々著明ナルガ如ク、且又内皮細胞ノ變化ハ膽管ニ於ケルヨリハ血管ニ於テ一般ニ高度ナリ。以上ノ所見ヨリグリッソン氏鞘ニ於テ結締織ノ増殖ガ他ノ部ニ比シテ高度ナルハ、此血管ノ變化ガ同時ニ此部ノ増殖ヲ助成セシメシモノニ非ズヤト考フルモノナリ。

五 造血現象ニ就テ

文 獻

抑々肝臟ニ於テ胎生期ニ血液ノ形成サルル事ニ就キテハ相當古クヨリ研究サレタリ、即チ Reichert,⁹²⁾ Weber,¹³¹⁾ Kölliker⁵⁹⁾ Fahrner,²⁹⁾ Neumann⁸¹⁾ 氏等ノ如シ。

Kölliker⁵⁹⁾ 氏ハ肝臟自身内ノ血液ト肝臟ニ入ル血管及ビ出ル血管ヨリ血液ヲ檢シテ其赤血球ヲ形成スル事明カナリト爲シ、唯白血球ヲモ形成スルヤ否ヤハ疑問ナルモ白血球様細胞ヨリ「ヘモグロビン」ヲ有スル細胞ニ變ズルモノナリト云フ。

Neumann⁶¹⁾ 氏ハ新鮮ナル肝臟液ト硬化セル肝臟ノ切片ヲ精細ニ檢シテ、肝臟ハ唯赤血球ノミヲ形成スト爲シ、其赤血球ハ勿論母細胞ヨリ形成サルルモ其母細胞ハ核ヲ有シ又核ヲ有セザルモノアリ、此細胞モ後ニ原形質内ニ核ヲ生ジ其核ノ周圍ニ核ヨリ來ルカ又ハ原形質自身ノ變化ニ依ルカ透明ナル黄色ノ物質ヲ生ズ斯クシテ幼若ナル血球ヲ生ジ、之ガ更ニ變形ヲ爲シ核ヲ失ヒテ無核ノ赤血球ヲ生ズト云フ。

Foa u. Salvioi⁶²⁾ 氏ハ犢ノ胎兒肝臟ヲ研究シ其造血期間内ニ來タレル巨大細胞様ノ構造ヲ有スル細胞ヲ血球ノ原始細胞ナリトシ之ヨリ無色ノ或ハ「ヘモグロビン」ヲ有スル原形質ノ細胞ヲ生ジ、之ヨリ赤血球ヲ生ズト爲ス。

Schmidt u. Martin¹⁰⁴⁾ 氏ハ赤血球ト同様ニ白血球ヲモ生ズト云フ、後者ハ毛細管ノ内皮細胞ヨリ生ジ之ガ分裂ニ依リテ増殖ス、赤血球ハ無色ノ細胞ヨリ其原形質内ニ「ヘモグロビン」ガ現出シ此細胞ガ更ニ分裂ヲ爲シテ生ズルモノナリト云フ、氏ノ説明ヲ見ルニ人間ノ胎兒ニ於テハ成熟ニ達スル迄ハ肝臟實質内ニ種々ナル大サノ細胞竈ヲ有シ、弱擴大ニテ見ル時ハ一見小ナル淋巴結節ヲ思ハシムルモノアリ此細胞ハ肝細胞ヨリ強ク染色サレ其細胞體ハ比較的小ナリ、此細胞ハ一部ハ限局性ニ擴大セル毛細管内ニ、一部ハ肝細胞ト血管壁トノ間ニ小ナル集積ヲ形成ス、此集積ヲ爲ス細胞ハ原形質ノ性質即チ「ヘモグロビン」ノ有無ニ依リテ互ニ區別スル事ヲ得、其周圍ニ於ケル著シク異レル無色ノ細胞ハ全ク白血球ト同様ニシテ此二者ハ全ク同一ナル細胞ナリト云フ、「ヘモグロビン」ヲ有スル細胞ハ無核ノ赤血球ニ比スレバ其大サハ著シク不同ナリ、同時ニ「ヘモグロビン」ノ含有量モ亦不同ニシテ全ク赤血球ト同様ニ有スルモノアリ或ハ原形質内ニ漸ク認知シ得ル程度ノ小ナル黄色點トシテ見ラルルモノアリ、小ナルハ「ヘモグロビン」ニ富ミ小ナル核質ニ富メル核構造ノ不明ナル核ヲ有ス、以上ノ細胞ハ同時ニ集積スル事アリ、稀ニハ無色ノ細胞ノミヨリ成ルモノアリ、白血球ノ母細胞ハ毛細血管膜ノ内皮細胞ニシテ之ガ毛細管内ニ増殖スルカ、或ハ境界サレタル肝臟細胞柱ノ間ニ於テ増殖シ細胞竈ヲ作り後ニ毛細管腔ト交通

スルニ至ルト云フ。

Saxer⁹⁰⁾ 氏ハ赤血球ノ發生ハ白血球ガ成人ノ臟器内ニ於テ來ルト同様ナル關係ニテ來ルト云ヒ、肝細胞ノ間ニ存在スル血管及ビ周圍結締織ヨリ細胞ガ移動シ來ルト云フ、此細胞ハ骨髓ノ骨髓細胞ト著シク類似ス、之即チ白血球、赤血球ノ母細胞ニシテ此母細胞ヨリ定型的ナ核分裂ヲ爲シテ I II III 度ノ移行細胞ヲ生ズ、初メハ移動性ヲ有シ組織内ニ進入シ之ヨリ次第ニ増殖スルモノナリト爲ス。如斯細胞ヨリナル細胞群ハ後ニ血管腔ト交通スルニ至リ、極メテ早期ニ於テハ肝臟内ニ小ナル多核ノ移動細胞及ビ巨大細胞ガ存在シ、成熟ニ近キモノニ在リテハ其他ニ尙ホ大ナル圓形ノ暗色ノ核ヲ有スル細胞ト小ナル赤血球ニ著シク近キ細胞ヲ現出ス、即チ第一度ノ移動細胞ヨリ第二度ノ細胞即チ Erythroblasten ヲ生ズルナリ。一方白血球モ亦其母細胞ハ赤血球ノ夫ノ如クニシテ白血球モ亦肝臟内ニ於テ生ジ得レ共初期ニ於ケル初メノ Erythroblasten 及ビ Leukoblasten ハ區別スル事不可能ナリ、然レ共一般ニ肝臟ハ胎生期ニ於テ赤血球ヲ形成スル臟器ナリト云フ。然ルニ

Denys,²³⁾ Löwit,⁶⁶⁾ v. Stricht,¹¹⁵⁾ Heinz⁴⁰⁾ 氏等ハ以上ノ說ニ全然反對シテ此二ツノ血球ハ其原始細胞ヨリ異リタルモノニシテ決シテ互ニ移行スルモノニ非ズト主張セリ。

Erdmann²⁷⁾ 氏ハ豚ノ胎兒ヲ研究シツノ結果 Saxer⁹⁰⁾ 氏ト同様ノ意見ヲ得タリトテ同氏ノ說ヲ是認シ、血球ノ母細胞トシテ記載セル大ナル細胞ハ明ラカニ Schmidt¹⁰⁴⁾ 氏ノ云ヘル毛細管内皮細胞ノ増殖ニヨリテ來タレリト爲ス白血球ノ母細胞ト同一細胞ナリ、然レ共毛細管内皮細胞ヨリ生ゼルヤ否ヤハ證明スル事ヲ得ザリキト云ヒ且又赤血球ハ「ヘモグロビン」ヲ得ル事ニ依リテ白血球ヨリ生ズトノ假定モ亦證明スル事ヲ得ザリキト、尙ホ氏ハ Saxer⁹⁰⁾ 氏ノ假說即チ赤血球ト白血球トハ共ニ同一ノ細胞ヨリ生ズルモ臟器ニ依リテ異リ、或ル臟器ニ於テハ多ク赤血球ヲ形成シ、他ノ臟器ニ於テハ白血球ヲ生ズトノ說ニ同意シテ、氏モ亦肝臟ハ一般ニ赤血球ヲ形成スル臟器ナリト云フ。

以上記述セル如ク肝臟内ニ於テハ其胎生期ニ血球ノ構成サルル事明カニシテ殊ニ赤血球ノ形成器ナル事ハ全ク明白ナル事實ナリ、而シテ如斯造血現象ハ出産後如ナル運命ヲ有スルモノナリヤノ問題ニ關シテハ各個體ニ於テ異リ早キハ胎生八箇月ニシテ已ニ見ズト爲スモ上記多數ノ人々ハ出産後二、三週間ニテ消

失スルモノナリトシ、Werdt¹⁾氏ハ少クトモ一箇月以内ニ消失スルモノナリト云フ。

次ニ遺傳毒兒ノ肝臓ニ於ケル浸潤性異常細胞ニ就キテノ報告ヲ探スルニ古クハGubler³⁵⁾氏ガ肝組織ガ纖維性細胞及ビ長形ノ細胞ニヨリテ置換ヘラルルヲ云ヒ、

Baerensprung⁶⁾氏ハ肝細胞ノ間ニ多數ノ小細胞ノ新生サルルヲ云ヒ、

Wagner¹²⁹⁾氏ハ増殖セル小葉内組織ガ小ナル又ハ中等大ノ圓形細胞ヲ有シ、同時ニ増殖セル小葉内組織ニ於テ到ル所毛細管ニ適應スル部分ニ於テ五乃至十箇以上ノ同様ナル小ナル又ハ中等大ノ時ニ著シク大ナル圓形又ハ橢圓形ノ核ヲ有スル細胞群ノ存在スルヲ記載セリ。

Schott¹⁰⁶⁾氏ハ門脈周圍及ビ肝細胞ノ間ニ存在スル圓形ナル細胞群ガ淋巴腺細胞ノ集團ノ如ク現ハラルルヲ云ヒ、

Hintzen⁴⁶⁾氏ハ圓形ノ強キ光澤ヲ有スル核及ビ通常ノ淋巴球及ビ淋巴球様ノ及ビ之ヨリ大ナル圓形ニシテ二乃至數箇ノ核ヲ有スル細胞ヲ區別セリ。

Wronka¹³⁸⁾氏ハ肝細胞ハ小葉内ニ現出スル異常細胞ノ増殖ノ爲メニ著シク不規則ナル配列ヲ爲シ、肝細胞自身モ種々ナル大サ及ビ形態ヲ爲スト云ヒ游離セル核及ビ核小體ハ死セル肝細胞ヨリ游離セルモノナリト云フ。

Caillé⁴⁷⁾氏ハ固有ノ圓形細胞ト特別ニ大ナル細胞ヲ區別シ後者ハ前者ノ間ニ散在性ニ存在ス、之ハ發育ヲ制サレテ胎生時ニ止マレル肝細胞ニ他ナラズト云ヒ、

Müller⁸⁰⁾氏ハ之ニ反對セリ、即チ此細胞ハ其發育ヲ中止セル肝細胞ニ非ラズト云フ。

Hutinel u. Hudelo⁵¹⁾氏ハ細胞ノ浸潤ニ至ル徑路ヲ區別シ、第一期ニ於テハ十箇乃至十箇以上ノ白血球ノ集團ヲ爲シテ擴張セル血管内ニ存在シ、所々血管外ニ游走セントスル時期ニシテ、第二期ハ滲透ニ依リテ血管外ニ出タル白血球ガ間質内ニ於テ屢々門脈枝ヲ環狀ニ圍ミ、又一方ニ於テハ肝細胞ノ間ニ存在スル時期ヲ云ヘリ、然レ共唯白血球トノミニテ精シキ記載ナシ、又曰ク肝細胞ハ明カニ認ムル事ヲ得レ共屢々其形態ニ異常ヲ來シ其原形質ハ透明ニシテ多少正常ヨリ顆粒狀ヲ呈シ核分裂ハ多數ニ存在シ其全テノ時期ヲ見ル事ヲ得、如斯増生セル肝細胞ハ殊ニ血管枝ノ近クニ於テ存在シ、此部ニ於テ同時ニ圓形細胞及ビ

紡錘形細胞ガ小ナル集團ヲ爲シテ互ニ隣接シ所々結締組織纖維ノ間ニ五乃至十箇ノ原形質ナキ大ナル細胞ノ集團ガ存在スルヲ見ルト云フ。

Haars³⁶⁾ 氏ハ Hutinel u. Hudelo⁵¹⁾ 氏ノ觀察ニ賛成シ、其浸潤細胞ハ白血球ニシテ之ガ門脈周圍及ビ小葉間結締組織中ニ、又殊ニ毛細血管中ニ現出スル所以ナリ、而シテ此細胞ハ汎發性ニ或ハ群ヲ爲シ、爲ニ毛細管ハ往々其一部ニ於テ全ク充サル、又屢々新生セル結締組織中ニ十箇乃至十箇以上ノ集團ヲ爲シテ存在スル爲ニ彼ハ之ヲ Bindegewebs Körperchen ト呼ベリ。

Tobeitz¹⁹⁾ 氏ハ單ニ肝臟小葉内ニ汎發性ニ來ル細胞浸潤ノアルヲ報ジ、

Hochsinger⁴⁶⁾ 氏ハ結締組織ノ増殖ト共ニ其結締組織ニ汎發性小圓形細胞ノ浸潤アリ同時ニ肝小葉内ニ於テモ同様ナル浸潤ヲ見、之ハ遺傳微毒兒ニ於テ定型的ニ來ルト爲シ、遺傳セル肝臟微毒ヲ有スル初生兒ニ於テハ其死亡率ハ生後一箇月中ニ於テ最モ多シト云フ。

Loder¹⁴¹⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル異常細胞ヲ白血球ト、小泡狀核ヲ有スル細胞及ビ著シク原形質ニ富メル上皮様細胞ヲ區別シテ、其最後ノモノハ血管内皮細胞ニシテ微毒毒素ニ依リテ増殖セルモノニテ即チ血管ノ内皮細胞ノ加答兒ニヨリテ來レルモノナリト云フ。

Hecker³⁹⁾ 氏ハ正當ナル肝臟ニ於テ定メラレタル基礎ニ準ジテ正常ナル肝臟ト微毒肝、分娩後及ビ胎兒ノ肝臟ヲ比較研究シ、二ツノ異レル細胞型ヲ區別セリ、第一型ハ氏ガ增生細胞トシテ記載セルモノニシテ圓形又ハ橢圓形ノ核ヲ有シ、肝細胞ヨリ稍々小ニシテ透明ナル小泡狀上皮様觀ヲナシ立派ナ核質ノ構造ヲ有スル核ヲ有ス、此細胞體ハ勿論大ナルモ屢々唯細ク核ヲ取圍ム層ヲ爲シ、稀ニハ全然不明ナル場合アリ、如斯細胞ハ箇々ニ存在スル事アルモ大體ニ於テ四乃至六箇ノ小ナル集團ヲ爲シ稀ニ四十以上ノ大ナル集團ヲ爲ス事アリ、此集團ニ於テハ細胞ハ互ニ密ニ配列シ、多クノ場合肝細胞ト密接ナル關係ヲ示ス、此細胞ハ出産前ニ死亡セル胎兒ニ在リテハ勿論常ニ多數ガ群ヲ爲シ大ナル集團ヲ爲ス場合ニ於テハ屢々血管腔内ニ進入シ、爲ニ血管ガ擴張ヲ示ス場合アリ、決シテ一定ノ位置ヲ示サズト云フ、氏ハ此細胞ハ肝細胞ノ增生セルモノニ他ナラズトシ正常ナル胎兒ニ於テモ發育現象トシテ現ハルルモ遺傳微毒ニ於テ特ニ著シク現レ、上記ノ如ク健康ナル胎兒ニ於テモ出産前ニ死亡セルモノニ於テ多數集團ヲ爲シ已ニ生後五日ヲ經過セルモノニ於テハ僅少トナリ集團ヲ形成セズ數週

乃至數箇月生活セルモノニ於テハ已ニ見ズト云ヒ、氏ハ之ヲ微毒ニ依リテ生理的機轉ノ亢進セルモノナリト云フ。第二型ハ血液細胞ニシテ著シク小ナル暗色ノ核ヲ有シ核構造ハ不明ナルモ大體ニ於テ圓形ニシテ稀ニ屈曲又ハ分割サル。細胞體ハ全然不明ナルカ或ハ細キ線トシテ見ラルル程度ニシテ、モシ廣ク存在スル場合ニハ赤血球ノ如ク「エオヂン」ニ依リテ一様ニ染色サル、即チ幼若ナル有核赤血球タル事ヲ知ル。此細胞ハ全然毛細管内ニ存在シ種々ナル大サノ群ヲ爲シ大ナル場合ニ於テハ間隙外ニ進入シ全組織ガ此細胞ニ依リテ充タサレタルノ觀ヲ呈スル事アリ、又屢々内皮細胞ト密接ナル關係アルヲ示シ組織ガ異常細胞及ビ血球ノ僅少ナル場合ニ於テハ毛細管腔ハ空虚ナルニ毛細管内壁ニ四乃至六箇ノ小ナル屈曲セル細胞ヲ見ルヲ云ヒ之ハ明ラカニ毛細管内皮細胞ヨリ發生セルヲ示スモノナリト云フ。又氏ハ Hutinel u. Hudelo⁵¹⁾ 氏ガ此第一型ノ細胞ヲ病的細胞ナリトセルニ反對シ、又 Loder¹⁴¹⁾ 氏ガ此細胞ガ毛細管内皮細胞ヨリ上皮様細胞トシテ發生ストノ說ニ反對シ、此第一型ニ屬スル細胞ハ常ニ肝細胞柱ト關係ヲ有シ決シテ毛細管壁トノ關係ハ有セズト云フ。尙ホ 1874 年ニ Toldt u. Zuckerkandl¹²¹⁾ 氏ガ胎兒肝臟ニ於テ實質細胞ノ他ニ尙ホ二箇ノ細胞型ヲ區別セリ、此二箇ハ一ハ増生細胞ニ、他ハ血液細胞ニ相當セルモノナリト云フ。以上ノ細胞ノ他ニ遺傳微毒ノ肝臟ニ於テ特ニ現ハルル白血球ト汎發性ニ來レル真正ナル小圓形細胞ノ浸潤ノ來ルヲ記シ、其細胞ハ屢々血液細胞ト區別シ難キモノアリト云フ。

Lubarsch⁶⁷⁾ 氏ハ 1900 年ニ肝臟ニ於ケル造血細胞竈ガ屢々粟粒護膜腫トシテ記載サレシモノアルヲ記シ、Baumgarten⁹⁾ 氏等ノ例ハ恐ラクハ此造血細胞竈ナリシニ非ザルカラ云フ。

Erdmann²⁷⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ニ於テハ造血現象ハ特ニ高度ニ現ハルトシ、氏ハ早産、死産、生後數時間生活セル遺傳微毒兒ノ肝臟實質内ニ多量ノ血液細胞ノ存在スルヲ見、健康兒ニ於ケルヨリモ造血現象ハ遙ニ長ク殘留スルモノナリ、然レ共生後三箇月ノ遺傳微毒兒ニ於テハ已ニ見ザリシト云フ。

Swart¹¹⁶⁾ 氏ハ最高一年三箇月ノ強度ナル貧血ヲ有スル遺傳微毒ノ無キ四人ノ乳兒ノ肝臟ヲ檢索シ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ第一度ノ移動細胞ヲ始メ種々ナル造血細胞ヲ發見シ、造血現象ノ異常ニ遺殘スルヲ云ヒ、此大ナル細胞中ニハ多數ノ核分裂ヲ見タリト、然レ共結締織ノ増殖其他ノ變化ハ見ザリシトテ氏ハ造血現象ノ異

常ニ長ク遺殘スルハ遺傳微毒ノ場合ニ於テノミ現ハルルモノニ非ラズト云フ。

Werdt¹³³⁾ 氏ハ從來粟粒護膜腫トシテ報告サレシ例ノ中ニハ粟粒形ニ現ハルル「ネクローゼ」ガ共ニ來ル事アルガ爲ニ造血細胞竈ガスク誤リテ報告サレシモノ多數ニ在リトシ、之ハ互ニ明カニ區別サル可キモノナリト云フ。氏ハ造血現象ハ健康兒ノ肝臟ニ於テハ胎生九箇月乃至出產迄ハ多數ニ有シ、生後一箇月以內ニハ消失スルモノナルモ遺傳微毒兒ニ於テハ尙ホ長ク遺殘スルモノニシテ生後六週間ノ遺傳微毒兒ニ於テ尙ホ胎生八箇月ノ胎兒ト殆ド同様ナル造血現象ヲ見タリト云フ。

考 按

肝臟内ニ於テ胎生時ニ造血現象殊ニ赤血球ノ形成サルル事ハ上記諸文獻ニ依リテ明カナリ。遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テ現ハルル異常細胞ニ對シテハ古クヨリ種々ノ說アル事已ニ述ベタル如シ、即チ淋巴球、淋巴球様ノ細胞トシテ記載サレ (Hintzen⁴⁶⁾)、或ハ肝細胞ノ變性ニ依リテ來ルト爲シ (Wronka¹³⁸⁾)、胎生時ニ於テ靜止セル未熟ナル肝細胞ナリトセラレ (Caillé¹⁷⁾)、又白血球ナリト云フモノ (Hutinel u. Hudels,⁵¹⁾ Marchand,⁷¹⁾ Haars³⁶⁾)、或ハ血管ノ内皮細胞ガ微毒々素ニ依リテ増殖セルモノナリ (Loder¹⁴¹⁾)ト爲セル如ク其說紛々トシテ一定セザリキ。然ルニ Hecker³⁸⁾ 氏ハ前記ノ如ク此異常細胞ヲ增生細胞ト血液細胞ヨリ成ルト爲シ Hutinel u. Hudelo⁵¹⁾ 氏ノ說及ビ Loder¹⁴¹⁾ 氏ノ說ニ反對シ、增生細胞ハ常ニ肝細胞柱ト關係ヲ有スト云フ。然レ共氏ノ細胞ニ對スル説明ヲ見ルニ、氏ガ增生細胞トシテ記載セシモノハ其形態ハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ云フ血管及ビ其周圍組織ヨリ來ルト爲ス移動細胞ニハ非ザルヤ、尙ホ又氏ガ血液細胞ナリト稱スルモノハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ云フ第一度、第二度ノ移行型ヲ爲ス血液細胞ト一致スルモノナリ。Erdmann²⁷⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ現ハルル異常細胞ハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ云フ造血細胞ト同一ナルモノナルヲ云ヒ、氏ト同様ナル所見ヲ述ベテコレニ賛成セリ、Schmidt¹⁰⁴⁾ 氏ノ論文ニ於テ見ル毛細管内皮細胞ヨリ増殖ニ依リテ來レル白血球ノ母細胞ナリトシテ説明セル細胞モ恐ラク亦 Hecker³⁸⁾ 氏ノ增生細胞及 Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ移動細胞ト同一ナルモノナル可シ、此細胞ノ運命ニ關シテハ Hecker³⁸⁾ 氏ノ論文中ニハ精細ナル記載ナク Schmidt¹⁰⁴⁾ 氏ハ之ヨリ白血球ヲ生ジ、次デ「ヘモグロビン」ヲ得ル事ニ依リテ赤血球ヲ生ズト云フ、此説明ニ對シテハ Erdmann²⁷⁾ 氏ハ精細ナル研究ノ結果如斯事實ハ證明スル事ヲ得ザリキト云ヘリ。而シテ肝

臟ニ於テハ Schmidt¹⁰⁴⁾ 氏ハ白血球モ同時ニ此細胞ヨリ形成サルト云フモ、多數ノ學者ハ其母細胞ノ異同ハ云ハザルモ主トシテ赤血球ヲ形成スルモノナリトシ Neumann⁶¹⁾ 氏ハ強硬ニ白血球ノ形成説ニ反對ヲ爲ス、Saxer,⁹⁹⁾ Erdmann²⁷⁾ 氏等ハ此細胞ヲ赤血球ノ原始細胞ナリト爲ス。而シテ上記 Hecker,³⁸⁾ Erdmann,²⁷⁾ Lubarsch,⁶⁷⁾ Werdt,¹³³⁾ 氏等ノ遺傳微毒兒肝臟ニ於ケル造血現象ニ對スル説ヲ綜合スルニ健康兒ノ肝臟ニ於ケル造血現象ハ出産後一箇月以內ニハ消失スルモノナルモ遺傳微毒兒ニ於テハ遙ニ長ク遺殘スルモノナリ、然レ共生後三箇月以內ニ於テ完全ニ消失スト爲ス (Erdmann²⁷⁾)

尙ホ Lubarsch,⁶⁷⁾ Werdt¹³³⁾ 氏等ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テ屢々造血細胞群ノ遺殘セルト粟粒狀ヲ爲ス「ネクローゼ」ノ存在スル事アルガ爲ニ粟粒護膜腫トシテ報告サレタルモノアルヲ云フ、即チ吾人モ亦往時粟粒護膜腫トシテ報告サレタルモノノ中ニハ如斯造血現象ガ異常ニ長ク遺殘スルガ爲ニ同細胞群ガ誤報サレタルモノ多數アルニ非ズヤト私考ス。

次ニ吾人ノ六例ヲ見ル時ハ全テノ例ニ於テ多數ノ所謂異常細胞ノ存在スルヲ認ム、其異常細胞ハ一部ハ各種ノ白血球ナル事明カナルモ、一方比較的少數ナルモ稍々透明ニシテ明カナル核構造ヲ示スモノハ Hecker³⁸⁾ 氏ノ所謂增生細胞或ハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ移動細胞ト爲セルモノ、Schmidt 氏ガ白血球ノ母細胞ナリト爲セルモノト同一細胞ナル可ク、之ヨリ稍々小ニシテ核質ニ富ム核ヲ有スル多數ニ存在スル細胞ハ恐ラク Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ第一度ノ移行細胞乃至ハ Hecker³⁸⁾ 氏ノ血液細胞中ノ「エオヂン」ニヨリテ染色サレザル細胞ト云フモノト同一ナル可ク、尙ホ「エオヂン」ニ染色サルル部分ヲ有スルモノハ Hecker³⁸⁾ 氏ノ「エオヂン」ニ染色サルル血液細胞、或ハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ云フ第二度ノ移行細胞ト一致スルモノナリ (第五圖)。而シテ最初ニ記述セル比較的透明ナル核ヲ有スル稍々大ナル細胞ニ在リテハ白血球ノ前階級ノ細胞ト云フモノトノ區別殆ド不可能ナリ、而シテ如斯細胞群中ニ於テハ上記二種ノ細胞ノ間ニ於ケル移行型ト考ヘラルル多數ノ細胞ヲ認メ、又 Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ第二度ノ移行細胞ト同一ナル細胞ト赤血球トノ間ニ於テモ同様ニ屢々其移行型ヲ認ムル事ヲ得、且又之等ノ細胞群中ニハ多數ノ細胞分裂像ヲ見ル事ヲ得。以上ノ事實ヨリ吾人モ亦 Hecker³⁸⁾ 氏ノ所謂增生細胞ト云ヒシモノハ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ移動細胞ト同一細胞ニシテ赤血球ノ原始細胞ニ非ラズヤ、而シテ此細胞ヨリ氏ノ所謂血液細胞即チ Saxer⁹⁹⁾ 氏ノ第一度ノ移

行細胞ヲ生ジ、次テ分裂ニヨリ（第五圖）次第ニ有核赤血球ヲ生ジ赤血球ヲ生ズルニ至ルモノニ非ズヤヲ考ヘシム、同様ノ状態ハ家兎ノ胎生期肝臟ニ於テモ亦見ル事ヲ得。然レ共其原始細胞ガ何レノ細胞ヨリ來ルカニ就キテハ明カニ知ル事ヲ得ザリキ。

以上ノ各種ノ血液細胞ハ吾人ノ全テノ例ニ於テ之ヲ見ル、殊ニ第二例ニ於テハ最モ高度ニシテ（第一圖）他ノ第一例、第三例、第四例、第五例、第六例ニ於テハ其程度ニ於テ幾分ノ差ハ存在ス即チ第五例ニ於テハ最モ少ク（第六圖）殊ニ透明ナル核構造ノ明カナル稍々大ナル細胞ハ比較的少ク Saxer⁹⁹⁾氏ノ第一度、第二度ト云ヘル細胞ノ中ニ混在シテ肝實質内ニ小ナル細胞群ヲ形成シ、且如斯細胞ヲ有セザル毛細管内ニ於テ赤血球中ニ屢々有核赤血球ヲ見ル事ヲ得。以上ノ所見ヨリ考フルニ造血細胞ノ最モ多數ニ現ハルル第二例ハ齡最幼クシテ漸ク生後一箇月餘ナリ、遺傳微毒兒ニ於テ如斯年齡ニ遺殘スルハ諸家ノ文獻ニヨリ當然アリ得可キニシテ疑ヲ挾ムニ足ラザルモ第四例、第六例ハ生後二箇月ニシテ尚ホ明カニ存在ス。第一例及ビ第三例ハ生後三箇月ナリ、之等ニ於テモ其程度ニ差ハ有スルモ尚ホ明カニ認ムル事ヲ得、殊ニ第一例ニ於テハ（第五圖）第四例ニ於ケルト同等乃至ハ之ヨリ稍々強度ニ造血細胞ノ存在ス。更ニ興味アルハ第五例ニシテ本例ハ生後十箇月十九日ナリ、而モ其程度ハ遙ニ減ズルモ尚ホ明カニ多數ノ造血細胞ヲ認ムル事ヲ得ルナリ（第六圖）。以上ノ事實ヨリ吾人ハ Erdmann⁹⁷⁾ 氏ガ生後三箇月ノ遺傳微毒兒ニ於テ已ニ見ズトノ說ニ對シ、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル造血現象ハ從來考ヘラレタルヨリ遙ニ長期ニ互リテ遺殘スルモノニシテ生後實ニ十箇月ニシテ尚ホ明カニ認メ得ルモノアルヲ主張セントスルモノナリ。

尚ホ造血現象ガ肝臟ノ何レノ部分ニ於テ行ハルルヤノ問題ニ關シテモ亦議論多シ、即チ毛細管内ニ於テ行ハルト爲スモノ、或ハ血管周圍ニ於テ血管ニ接シテ行ハレ、之ガ後ニ血管腔ト交通スルニ至ルトナスモノ、或ハ一部ハ擴張セル毛細管内ニ於テ行ハレ一部ハ肝細胞ト血管壁トノ間ニ於テ形成サルト爲スモノ等アリテ今日未ダ決スルニ至ラズ、然ルニ Straßburg¹¹⁴⁾ 氏ハ肝臟ニ於ケル格子狀纖維ノ研究ヲ行ヒ、此造血現象ハ明カニ血管外ニ於テ行ハルルモノナリト主張ス。吾人ハ本問題ニ關シテハ此部ニ述ベズ、他ノ研究ヲ記述シタル後再ビ改メテ本問題ニ觸レントス。

六 「プラズマ」細胞ニ就テ

文 獻

一定ノ細胞ニ對シテ「プラズマ」細胞ナル名稱ヲ與ヘタルハ Waldeyer¹³⁰⁾ 氏ヲ以テ嚆矢ト爲ス、氏ハ 1875 年ニ人間ノ血管外膜、外膜周圍結締織、皮下結締織中及ビ多數ノ他ノ臟器中ニ於テ未ダ全ク記載サレザル大ナル圓形ノ細胞ヲ發見シ之ヲ結締織ヨリ誘導サレタルモノト考ヘ、之ニ「プラズマ」細胞ナル名稱ヲ與ヘタルニ始マル。

Ehrlich²⁶⁾ 氏ハ數年ノ後ニ上記 Waldeyer¹³⁰⁾ 氏ノ云フ細胞中ヨリ一定ノ染色ニ依リテ其原形質内ニ微細ナル顆粒ヲ有スル細胞ヲ發見シ、之ヲ他ノ細胞ト區別シテ「マスト」細胞中ニ加ヘタリ。

Westphal¹³⁴⁾ 氏ハ Ehrlich²⁶⁾ 氏ノ此關係ヲ氏ノ後直チニ同様ニ記載セリ。

Ackermann¹⁾ 氏ハ又「プラズマ」細胞ノ研究ヲ行ヒ、氏モ亦此細胞ハ結締織ヨリ現出スルモノナリト主張セリ。

Scheltema¹⁰⁰⁾ 氏ハ家兎ノ肝臟内ニ「テレピン」油ヲ注射シタル後、肝臟内ニ同細胞ノ現ハルルヲ發見シ、氏モ亦結締織細胞ヨリ發生スルモノナリト云フ。

然ルニ Unna^{123, 124, 125)} 氏ハ 1891 年ニ上記 Waldeyer¹³⁰⁾ 氏ノ「ポリクロームス—メチーレンブラウ」ニ依リテ染色スル一定ノ細胞ヲ指摘シ、之ニ「プラズマ」細胞ナル名稱ヲ與ヘタリ、而シテ Waldeyer¹³⁰⁾ 氏ノ說ニ賛成シテ此細胞ガ結締織細胞ヨリ發生スルモノナリト主張セリ。

Marschalko^{74, 75)} 氏及ビ Jadassohn⁵³⁾ 氏ハ此細胞ヲ實驗的ニ研究シ種々ナル動物ノ皮膚及ビ肝臟ニ實驗的炎症ヲ起サシメ、此部位ニ現レタル「プラズマ」細胞ヲ精細ニ研究シテ同細胞ハ結締織ヨリ來ルモノニ非ラズシテ明カニ淋巴球ヨリ來ルモノナリト主張シ Unna¹²⁴⁾ 氏ノ說ニ反對セリ、其論據トシテ氏ハ Unna 氏ノ云フガ如キ「プラズマ」細胞ノ結締織細胞トノ移行型ハ發見スル事ヲ得ザリシト、實驗的ニ起サシメタル動物ノ炎症部位ニ於テ僅々二十四時間ノ後ニ固定セルモノニ於テ結締織細胞ヨリ生ズトハ考ヘ難キ程多數ノ同細胞ノ發見スルヲ認メタルト、此炎症ノ始リニ於テ淋巴球ト「プラズマ」細胞トノ間ニ種々ナル移行型ヲ見、且同細胞ノ存在部位ハ淋巴球ニ類似シ同細胞ハ血管ヲ圍ミテ浸潤層ノ境界部ニ近ク存在セル淋巴球中ニ來ル。又白鼠、「ラッテ」ノ正常脾ノ血管内ニ定型的ナル同細胞ノ來ル等ノ事實ヨリ氏ハ極力淋巴球ヨリ來ルヲ主張セリ。

Hodara⁴⁹⁾ 氏ハ造血臓器ノ精細ナル研究ヲ爲シ、真正ノ「プラズマ」細胞即チ Unne¹²⁴⁾ 氏ノ云フ同細胞ハ發見セズシテ假性「プラズマ」細胞又ハ Polyeydocyten トモ呼ブ可キ「プラズマ」細胞ニ著シク類似スル細胞ヲ發見シ、ソノ形態ハ Marschalkò⁷⁴⁾ 氏ノ云フ同細胞ト同一ナルモノナリト云フ。

Ramon y Cajal⁹¹⁾ 氏ハ Unna¹²⁴⁾ 氏ノ觀察セル細胞ニ Cyanophile Zellen ナル名稱ヲ附シ、淋巴腺中ニ於テ芽細胞ヨリ生ジ淋巴間隙ヲ通リテ現ハレ淋巴球トハ異リ「ロイコプラステン」或ハ「エリトロプラステン」ト著シク類似セル像ヲ呈スト云フ。

Marchand⁷²⁾ 氏ハ同細胞ハ同時ニ結締織ノ淋巴球様細胞ヨリ來リ血管ノ外膜細胞ノ増殖ニ依リテ來ルモノナリト云フ。

Paltauf⁶⁸⁾ 氏ハ「ツベルクリン」ヲ注射シテ人工的ニ白血球過多症ヲ起サシメタル家兎ノ脾髓中ニ美麗ニ染色サルル「プラズマ」細胞ヲ見タリ、且充血セル血管中ニ多數ニ存在シタル事實ヨリ氏ハ本細胞ハ炎症機轉ニ依リテ現出セル白血球ヨリ來ルモノナリト云フ。

Darier²¹⁾ 氏ハ本細胞ニ就キ次ノ如ク記セリ

Dès qu'on sort du type parfaitement défini, intervient une part d'appréciation personnelle, et c'est en cela, que la conception de l'auteur (Unna) est attaquant. On peut objecter, qu'il n'a pas fourni la preuve expérimentale de l'origine des plasmazellen aux dépens des cellules fixes; que s'il voit des formes de passage avec ces derniers éléments, d'autres et notamment Marschalkò, en trouve entre les plasmazellen et les lymphocytes; que l'apparition précoce des plasmazellen, leur siège perivascularaire, leur division amitotique semblent plaider en faveur de leur origine hématogène plutôt, que l'origine histogène.

次デ更ニ Marschalkò⁷⁴⁾ ノ說ヲ是認シテ

Si l'on admet avec Unna que les plasmazellen dérivent des cellules fixes, la portée de la découverte est plus considérable; malheureusement le fait n'est pas prouvé, j'ai même rappelé, que bien des circonstances plaident en faveur de leur origine hématique. ト云ヘリ

Schridde¹⁰⁹⁾ 氏ハ同細胞ガ眞性ノ淋巴球ヲ生ジ得ザル骨髓ニ於テモ現レ、脾臓ニ於テハ淋巴結節ノ周圍ニ於テ存在スル事アリ、之即チ組織球性母細胞ヨリ生ズル證據ナリト爲シ眞性淋巴球ヨリ生ズトノ說ニ反對セリ。

Schottländer¹⁰⁷⁾ 氏モ同細胞ノ發生ニ就キ精シキ研究ヲ爲シ、動物ニ人工的ニ結核ヲ起サシメ同細胞ノ現出セルヲ見テ氏モ亦本細胞ハ淋巴球ヨリ來ルモノナリト云フ。

Justi⁶⁵⁾ 氏ハ Marchand 氏ノ指導ノ下ニ本細胞ノ研究ヲ爲シ、同細胞ハ淋巴球ヨリ來ルモノニシテ其固有ナル核ハ淋巴球ノ夫レト同一ナリト云フ。

Krompecher⁶¹⁾ 氏ハ三年間ニ互リテ種々ナル炎症、肉芽腫、腫瘍ヲ種々ナル組織及ビ臓器ニ於テ研究シ、本細胞ハ多數ハ淋巴球ヨリ來リ、一部ハ多核白血球及ビ大單核白血球ヨリモ來ルト主張セリ。

Joannovics⁶⁴⁾ 氏ハ本細胞ハ雷ニ淋巴球ヨリ來ルノミナラズ、多核白血球ヨリモ又 Unna 氏ノ主張セル如ク結締織ヨリモ生ズルモノナリ、而シテ此細胞ハ貪喰作用ヲ有スト爲ス。

Almkvist⁴⁾ 氏ハ「プラスマ」細胞ヲ二種アリト爲シ一ハ Marschalkò⁷⁴⁾ 氏ノ云フ淋巴球ヨリ來ルモノ即チ淋巴球型ニ屬スルモノト、他ハ Unna¹²⁴⁾ 氏ノ云フ結締織ヨリ生ズルモノ即チ結締織型ニ屬スルモノ之ナリト云フ。

Pappenheim^{86, 87)} 氏ハ本細胞ハ組織ノ淋巴球様細胞ヨリ生ズルモノニシテ決シテ眞性淋巴球ヨリ生ズルモノニ非ラズト云フ。

Maximow⁷⁶⁾ 氏ハ炎症組織内ニ現ハルル一定ノ細胞ヲ Polyblasten ト呼ビ炎症組織内ニ來ル圓形細胞ノ母細胞ニシテ、此細胞ハ若キ新生サレタル結締織ヨリ來リ「プラスマ」細胞モ亦之ヨリ來ルモノナリト云フ。

Schlesinger¹⁰²⁾ 氏ハ Unna¹²⁴⁾ 氏ノ云フ「プラスマ」細胞ト Marschalkò⁷⁴⁾ 氏ノ云フモノトハ互ニ異リタル細胞型ナリト云フ。

Porcile⁸⁹⁾ 氏ハ家兔ノ肝臓ニ「テレビシ」油ノ注射ヲ行ヒタルニ淋巴球ト同時ニ多數ノ「プラスマ」細胞及ビ此兩者ノ移行型ノ現レタルヲ見、同細胞ハ淋巴球様細胞ヨリ來リ其發現及ビ増加ハ小血管ノ周圍ニ於テ行ハルト云フ。

Schwarz¹¹¹⁾ 氏ハ家兔ノ大網膜ニ現ハルル細胞ノ研究ヲ爲シ本細胞ハ淋巴球系ヨリ來レルモノニシテ小淋巴球ト同様ニ大淋巴球ヨリモ來ルト云フ。

Sormani¹¹²⁾ 氏ハ胃癌ニ於ケル炎症性浸潤中ニ存在スル「プラスマ」細胞ヲ研究シ、氏ハ組織内ノ淋巴球ト本細胞トノ間ニ移行型ヲ發見シ、本細胞ハ淋巴球ヨリ來ルモノナリト主張セリ。

Alagna²⁾ 氏ハ耳鼻咽喉疾患ニ於テ現ハルル「プラスマ」細胞ヲ精細ニ研究シ、

腺間質結締織内ニ於テ常ニ多數ノ結締織性細胞ト定型的「プラズマ」細胞トノ移行型ヲ又齟齬ニ於テ「プラズマ」細胞ト一定ノ鹽基性嗜好紡錘狀細胞トノ移行型ガ多數ニ存在スルヲ見タリトテ氏ハ二種ノ方法ガ考ヘラルト云フ即本細胞ガ上記紡錘狀ノ細胞ヨリ生ズルカ或ハ一定ノ結締織性細胞ヨリ來ルカナリトシ、氏ハ凡ソ炎症ニ自動的ニ作用スル全テノ細胞ハ恐ク本細胞ト成ル事ヲ得ト云フ。

Hannes⁸⁷⁾ 氏ハ人間ノ涙腺ニ現ルル本細胞ヲ研究シ、高年ニナルニ從ヒテ同細胞ハ間質中ニ多數ニ現ル、而シテ一方涙腺ニハ一般ニ淋巴球ノ現出極メテ稀ナリ、又モシ血管ヨリ游出セリト爲スナラバ血管ノ周圍ニ淋巴球ト共ニ存在ス可キニ如斯部分ニ本細胞ノ存在スルハ極メテ稀ニシテ多クハ葉間結締織内ニ存在シ、而モ常ニ結締織ト關係ヲ有シ且 Unna¹²⁴⁾ 氏ノ見タルガ如キ移行型ヲ見ル事ヲ得ルヲ以テ本細胞ハ結締織ヨリ來レルモノナリト主張ス。

田村教授ハ本細胞 特徴トスル車軸狀ノ核造構、原形質ノ後染色性 (Metachromasie) 竝ニ核周圍ノ淡染暈 Perinuklearhof 等凡テ之細胞ノ退行性現象ヲ意味スルモノト倣シ、本細胞ハ決シテ獨立セル細胞種ニ非ズシテ淋巴球ガ死滅ニ至ル一過程ニ於テ現ス状態ニ過ギズトノ意見ヲ懷カル。

尚ホ本細胞ハ Marschalkò,⁷⁴⁾ Joannovics,⁶⁴⁾ Prötz⁹⁰⁾ 氏等ニ依レバ健康ナル臟器ニ於テモ現ハルルモノニシテ人體ニ於テハ脾臟ニ、家兎ニ於テハ淋巴腺及ヒ脾臟ニ現ハルト云フ。然レ共通常ハ炎症組織、殊ニ種々ノ肉芽組織即チ肉芽腫、結核、微毒等ニ於テ現レ就中微毒性炎症ノ場合ニ於テ最モ多數ニ現ハルト云ハル。次ニ此細胞ノ生物學的性質トシテ古クヨリ種々論議サレシモ Schridde¹⁰⁸⁾ 氏ガ1906年ニ肥大性淋巴腺ヲ精査シ、本細胞ガ上皮細胞ノ間ヲ通リテ移動スルヲ見且其後同氏ハ同様ノ所見ヲ淋毒性喇叭管炎ニ於テ見タリト云フ、Joannovics⁶⁴⁾ 氏モ亦本細胞ノ移動スルヲ證明セリ、Alagna²⁾ 氏ハ上記耳鼻咽喉ノ諸疾患ニ於テ本細胞ガ一定ノ狀況ノ下ニ眞ノ前進運動ヲ行フモノナル事ヲ證明セリ。

此細胞ノ運命ニ就キテモ亦議論甚ダ多ク、破壊サルト爲スモノ、空泡形成ヲ爲スト云フモノ、硝子様變性ニ陥ルト爲スモノ等アルモ多數ノ人ハ結締織ニ變ズルモノナリトス即チ Machand,⁷²⁾ Schottländer,¹⁰⁷⁾ Joannovics,⁶⁴⁾ Pappenheim⁸⁶⁾ 氏等ノ如シ、Krompecher⁶¹⁾ 氏ハ後ニ變性シ原形質ガ空泡狀構造ヲ呈シ遂ニ結締織ニ變ズトシ Foa¹⁴²⁾ 氏ハ同細胞ハ死滅スルカ再ビ淋巴球様、又ハ橢圓形、長形ノ細胞トナリ結締織纖維ノ間ニ介在スト云ヒ Bosellini¹⁶⁾ 氏モ同細胞ハ結局結締織

ニ變ジ變ビザルモノハ上皮様細胞トナリ或ハ硝子様細胞トナルト云フ、本教室
田村教授ハ結局破壊サルルモノナリトセラル。

次ニ此細胞ガ未ダ初生兒ノ肝臟ニ證明サレタル例ヲ見ズ、殊ニ遺傳微毒兒ノ
肝臟ニ於ケル本細胞ノ發現ノ有無ニ關シテハ其報告極メテ稀有ニシテ吾人ハ只
Poreile⁸⁹⁾ 氏ガ肝臟ニ於ケル本細胞ノ研究ヲ爲セル際ニ二例ノ遺傳微毒兒ノ肝臟
ニ於テ檢索シ唯血管、膽管周圍ノ組織中ニ於テ僅ニ本細胞ノ現出セル報告ヲ發
見シ得ルノミナリ。

考 按

「プラズマ」細胞ノ問題ニ關シテハ上記文獻ニ見ルガ如ク、其細胞ノ本態ハ何
者ナリヤ、其母細胞ハ如何ナル細胞ナリヤ、其運命ハ如何ナル徑路ヲ取ルモノナ
リヤ等ノ問題ニ關シテ其論議サルル所多種多様ニシテ未ダ決定ヲ見ザルナリ。
今後之等ノ問題ニ關シテハ更ニ一層ノ研究ヲ要スルモノナリトス。

何レニセヨ本細胞ガ一般ニ炎症、殊ニ肉芽性炎症ニ於テ多數ニ現出スルモノ
ニシテ、就中諸種微毒性炎症ニ於テ多數ニ現出スルハ已ニ衆知ノ事實ナリ。然
レ共未ダ健康ナル胎兒、初生兒ノ肝臟内ニ本細胞ノ發見サレタル報告アルヲ聞
カズ。尙ホ又遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テ本細胞ガ現出セルヲ認メタリトノ報告ハ
吾人ノ淺見殆ド之ヲ見ル事能ハズ唯 Poreile⁸⁹⁾ 氏ガ肝臟ニ於ケル本細胞ノ研究ヲ
爲セル際ニ僅ニ二例ノ遺傳微毒兒ヲ檢索シテ極メテ少數存在セルヲ發見シ報告シ
タルヲ見ルノミナリ。吾人ノ六例ヲ通見スルニ上記ノ如ク全テノ例ニ於テ本細
胞ヲ發見スル事ヲ得、然レ共其數決シテ多カラズ極メテ少數ニ散在性ニ存在シ
往々或ハ看過サル事アル可キ程度ノモノニシテ後天性微毒性變化ニ於テ見得ル
ガ如キ多數集團ヲ爲スモノハ見ル事能ハズ、其出現部位ハ小葉間結締織内殊ニ
グリッソン氏鞘ノ内外ニ存在ス、而モ其存在ハ其部ニ於ケル他ノ病的諸細胞ノ數
ニ比例セズ、而モ之ガ比較ニ用ヒタル四例ノ營養障害兒及ビ肺炎兒ノ肝臟ニ於
テハ如斯細胞ヲ發見スル事ヲ得ザリキ。吾人ハ本細胞ノ發生及ビ運命ニ關シテ
ハ幾分疑問ヲ有スルモノナルモ此問題ハ今後ノ研究ヲ待ツ事ト爲シ此處ニハ觸
レズ、何レニセヨ少クトモ遺傳微毒兒ノ肝臟内ニ於テ其數ハ極メテ僅少ナレド
モ現出スルモノニシテ此事ハ本疾患ノ診斷ヲ爲ス上ニ重要ナル所見ノ一トシテ
數ヘラル可キモノナルヲ信ズ。而シテ何故遺傳微毒兒ニ於テハ後天性微毒ニ依

ル諸疾患ニ於テ見ルガ如ク多數ノ本細胞ヲ生ゼザルヤ、或ハ何故其發生部位ガ比較的一定ノ部分ニ限ラルルヤ等ノ問題ニ關シテハ今後本細胞ノ本態竝ニ其運命ト共ニ充分ナル研究ヲ要スルモノナリト私考ス。

七 格子狀纖維ニ就テ

文 獻

肝臟ニ於ケル格子狀纖維ニ就キ精細ナル研究ヲ爲シ其本態ヲ明ラカニセルハ今⁶⁰⁾氏ヲ以テ嚆矢トナス、然レ共肝臟組織内ニ極メテ纖細ナル支柱組織ノ存在スル事ハ已ニ六七十年前ヨリ知ラレタリシガ其組織ヲ容易ニ現出ス可キ染色方法無カリシ爲稀ニ見得ル此組織ノ文獻中ニ於テモ其性質及ビ其配列狀態ハ明ラカナラザリキ、然ルニ Maresch⁷³⁾氏ガ Birschowsky氏ノ神經纖維ニ應用シタル方法ニ改良シテ此組織ヲ現出シ得ルニ至ルヤ、此方面ノ研究著シク旺盛トナルニ至レリ、本研究ハ主トシテ病理學者ニ於テ行ハレ、解剖學者ニ於テハ特ニ此方面ノ研究ナカリキ。

肝臟ニ於ケル本纖維ハ His⁴⁷⁾ u. Henle⁴¹⁾氏ガ肝臟小葉内結締組織トシテ記載シ、次デ Kupffer^{62, 63)}氏ガ其本態乃至配列ニ就キテ研究セルニ始マル。

His,⁴⁷⁾ Henle,⁴¹⁾ Hering⁴²⁾ Toldt¹²⁰⁾氏等ハ肝臟小葉内結締組織ガ小葉内血管ヲ網狀ニ纏絡シテ肝細胞柱ノ間ヲ距ツルモノナリト考ヘタリ。

Leydig,⁶⁴⁾ Eberth,²⁵⁾ Boll,¹⁴⁾ Eward u. Kühne,²⁸⁾ Fleischl,³¹⁾ Miura⁷⁸⁾氏等ハ本纖維ハ主トシテ細胞柱ヲ取圍ム厚キ纖維網ヲ爲シ臟器ノ上皮様細胞ヲ支持スルニ役立つモノナリト云フ。

Kupffer^{62, 63)}氏ハ小葉内纖維ヲ二種ニ區別シ、一ハ纏絡纖維ニシテ毛細管ヲ取圍ミ肝細胞間ヲ通リテ網狀ヲ爲シ他ノ毛細管ニ至リテ纏絡スルモノニシテ、二ハ放線狀纖維ニシテ肝細胞ノ間ニ入り込ミ互ニ結合シテ肝細胞ヲ取圍ムモノナリトス。

Böhm u. Dawidoff¹³⁾氏ハ Kupffer⁶²⁾氏ノ纏絡纖維ハ毛細管ヲ纏絡スルモ放線狀纖維ハ眞直ニ走リテ肝細胞ヲ纏絡セズト云フ。

Mac Gilavry⁶⁹⁾氏ハ本纖維ハ小葉間結締組織ヨリ出デテ肝小葉内ニ入り一部ハ毛細管周圍ノ淋巴腔ノ壁ヲ爲スト云フ。

Imminger u. Frey⁵²⁾氏ハ之ハ一ツノ膜ニシテ一方肝細胞柱ヲ取圍ミ他方毛細

管周圍ノ淋巴腔ノ壁ヲ形成スルモノナリト云フ。

Disse²⁴⁾氏ハ肝小葉内ノ各毛細管ヲ圍ム纖細ナル纖維網ヲ有スル無構造ノ膜ヲ發見シ、之ハ毛細管周圍ノ淋巴間隙ノ外壁ヲ作り之ガ肝細胞柱ヲ横斷スル多數ノ纖維ニ依リテ附近ニ存在スル毛細管ノ同様ナル膜ト結合スト云フ。

Oppel⁸⁵⁾氏ハ Kupffer⁶²⁾氏ト同様ニ小葉内纖維ヲ纏絡纖維ト放線狀纖維トニ區別シ、其纏絡纖維ヲ更ニ區別シテ毛細管ヲ纏絡セルモノト Disse²⁴⁾氏ノ云フ毛細管鞘ニ存スル纖維トニ區別セリ。

Moise u. Frenkel³⁴⁾氏ハ肝小葉内結締織ハ互ニ結合シテツノ網ヲ作り此網ハ肝細胞柱ノ有窓性固有膜ノ一種ヲ形成スルモノナリト云フ。

Maresch,⁷⁸⁾ Hexheimer,¹⁴³⁾ Schmidt,¹⁰⁵⁾ 今⁶⁰⁾氏等ハ毛細管ヲ取圍ム纖維ヲ重視シテ肝細胞柱ヲ越エテ走ル纖維ハ考ヘズ。

Russakoff⁹⁸⁾氏ハ本纖維中其太キモノハ決シテ一本ノ纖維ニテハナク多數ノ細キ纖維ノ集合ヨリナリ、之ヨリ纖維ガ分レテ一方ニ於テハ肝細胞柱ヲ圍ミ他方ニ於テハ毛細管ヲ取圍ム、此細胞柱ヲ圍ム纖維及ビ毛細管周圍ヲ取圍ムモノハ一般ニ細クシテ唯小葉ノ周圍及ビ中心靜脈ノ周圍ニ於テノミ太キ纖維ノ存在スルヲ見ル、之ヨリ分レタル纖維即チ細胞柱及ビ毛細管周圍ヲ取圍ム細キ纖維ノ間ニハ極メテ薄キ透明ナル膜ガ緊張ス、換言スレバ平等ニ透明ナル薄キ膜ノ中ニ上記ノ細キ纖維ガ存在シテ、一見此膜ノ支柱ヲ爲スモノニシテ、爲ニ人工的器械的乃至ハ肝細胞ノ諸種病理的現象ニ依リテ互ニ剝離セル場合ニ於テモ此纖維ハ決シテ游離スル事ナクシテ透明ナル稍々灰色ニ染マル物質ニ依リテ互ニ結合サルモノナリト信ジ、此纖維ノ本態ニ就キテ氏ハ一種ノ未膠化結締織纖維 Präkollagenes Bindegewebsfasern ナリト云フ。

Rössle⁹⁵⁾氏ハ此纖維ノ性質ニ就キテ研究シ、本纖維ハ一種ノ弾力性ヲ有スルモノニシテ正常ノ状態ニ於テハ中等度ノ緊張ヲ爲シ之ガ伸展セル場合ニ於テハ細クナリ又弛緩セル場合ニ於テハ太クナル、一般ニ此纖維ノ伸展スル場合即チ細クナル場合ハ炎症性浮腫ノ場合ニシテ特ニ周圍部ニ於テ來リ、局部性ニ來ルモノハ限局性浮腫、實質細胞ノ増殖及ビ出血時ニ於テ來リ殊ニ過度ニ伸展サル場合ハ於テハ其周圍部ニ於テ破壊サルト云ヒ、弛緩スル場合即チ纖維ノ太クナル場合ハ急性乃至亞急性ニ腫脹セルガ急ニ消失セル場合ニ來ルト云フ。且本纖維ハ抵抗力ハ極メテ強ク他ノ細胞ガ破壊サレシ時ニ於テモ依然トシテ存在シ

一見「ネクローゼ」= 陥レルガ如キモノニ於テモ本纖維ノ染色ヲ行フ時ハ尙ホ完全ナル格子狀纖維網ヲ見ル事ヲ得。又慢性亞急性炎症ニ於テ、又高年ニ於テ往往本纖維ノ硬變 Sklerose ヲ起ス事アリト云フ。

又本纖維ガ如何ナル細胞ヨリ生ズルモノナリヤノ問題ニ關シテモ亦議論甚ダ多クシテ

Hexheimer¹⁴³⁾ 氏ハ本纖維ノ異常ニ増殖セルモノニ於テ之ニワシグーソン氏染色法ヲ行ヒタレ共本纖維ト結締組織トノ關係ヲ明カニスルヲ得ザリシト云ヒ

Rössle^{98, 145)} 氏ハ本纖維ハ決シテ幼若ナル結締組織ヨリ來ラズシテ常ニ格子狀纖維ノ増殖ニ依リテ來ルモノナリト云ヒ

今⁶⁰⁾ 氏ハ胎兒肝臟ノ精細ナル研究ヲ遂ゲテ本纖維ハグリッソン氏鞘及ピ中心靜脈ノ結締組織トハ關係ナクシテ毛細管ノ紡錘狀乃至星芒狀細胞ヨリ來ルモノニシテ胎生ノ比較の初期ニ於テ此關係ハ認メ得ルモ胎生八乃至九箇月ニ於テハ已ニ全ク明カナラズト云フ。

Straßburg¹¹⁴⁾ 氏ハ Russakoff⁹⁸⁾ 氏ト同様ニ本纖維ハ決シテ特別ナルモノニ非ラズシテ所謂 Präkollagenes Bindegewebe ナリト考ヘタリ。

遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル格子狀纖維ノ状態ニ就キテハ其報告例甚ダ僅少ナリ。

今⁶⁰⁾ 氏ハ遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テモ已ニ早期(約五箇月)ニ健康兒ノ肝臟ニ於ケルト同様ニ形成サルト、又結締組織増殖ノ著シク高度ナル部分ニ於テハ本纖維ハ證明シ得ザリシト云フ。

Straßburg¹¹⁴⁾ 氏ハ遺傳微毒兒肝臟ニ於ケル本纖維ノ状態ヲ精細ニ檢索シテ、一般ニ本纖維ハ増殖ヲ示シ且肥厚ス、肝小葉ガ著シク犯サレタルモノノ肝細胞柱ノ部分ニ於テハ本纖維ハ放線狀纖維モ纏絡纖維モ明カニ區別スル事ヲ得ズ、高度ニ犯サレタルモノニ在リテハ其増殖、肥厚共ニ増加シ正常ナル部分ニ比シテ遙ニ密トナル。而シテ其肥厚ハ主トシテ肝臟被膜下及ピグリッソン氏鞘ノ附近ニ於テ現ハレ、往々肝細胞ノ變化ト本纖維ノ増殖トハ平行セズ、グリッソン氏鞘ノ部分ニ於テハ上記ノ如ク常ニ本纖維ノ増殖ヲ爲スモ一方小葉内ニ於テハ本纖維ノ増殖ハ増殖僅少ナルカ又ハ全ク増加ヲ認メザルモノアリ、稀ニ逆ニ減少セルモノアリト云フ。氏モ亦遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テ造血現象ノ遺殘スルヲ云ヒ之ト格子狀纖維ノ關係ニ就キテハ此間ニ特別ナル關係ヲ見ズシテ細キ毛細管内ニ

存在スル小ナル細胞群ハ格子狀纖維ヲ有セズ，然レ共纖維網中ニ小ナル造血細胞群ガ箇々接シテ存在ス，大ナル造血竈ニ於テハ僅少ナル細キ本纖維ガ到ル所ニ存在スルヲ見ルトテ氏ハ Erdmann²⁷⁾ 氏ノ説ニ賛成シテ，造血現象ハ肝細胞柱ト血管壁トノ間ニ於テ行ハルモノナリト主張セリ。

考 按

格子狀纖維ニ關スル種々ナル問題ニ關シテハ，上記ノ如ク議論甚ダ多クシテ一致ヲ見ザルモノアリ，即チ本纖維ノ本態ニ關シテハ甲論乙駁殆ド其歸スル所ヲ知ラズ，今後更ニ一段ノ研究ヲ要ス可ク，又本纖維ノ構造ニ關シテハ上記ノ如ク略ボコレヲ三ツニ區別スルコトヲ得ルモ，今日一般ニ信ゼラルルハ His,⁴⁷⁾ Henle,⁴¹⁾ Hering,⁴²⁾ Toldt,¹⁰²⁾ v. Kupffer,^{62, 63)} Maresch,⁷³⁾ Schmidt,¹⁰⁵⁾ 今⁶⁰⁾ 氏等ノ唱フル，格子狀纖維ハ主トシテ毛細管ニ沿ヒテ配列スルモノニシテ毛細管外膜ノ形ニ於テ存在スルモノナリト爲ス説ナリトス。

本纖維ノ抵抗力ニ關シテハ Rossle⁶⁵⁾ 氏ノ説ヲ吾人モ亦認ムルモノナリ，吾人ノ研究ニ於テモ急性ニ且高度ニ犯サレタル肝臟ニ於テ本纖維ノ染色ヲ行フ時ハ其變化極メテ少ク，又高度ノ死後變化ヲ爲セル肝臟ニ於テモ本纖維ハ明カニ正常ノ性状及ビ構造ヲ有スルヲ認メタリ，即チ吾人モ亦本纖維ノ異常ニ抵抗力ヲ有スルモノナル事ヲ信ズルモノナリ，而シテ肝細胞ノ變化ノ程度ト本纖維ノ變化ノ程度ハ互ニ平行セザルモノノ如シ。

遺傳毒兒ノ肝臟ニ於ケル格子狀纖維ノ變化ニ就キテハ今⁶⁰⁾ 氏已ニ其増殖及ビ肥厚ヲ來スヲ云ヒ，高度ニ犯サレタル部分ニ於テハ本纖維ヲ證明スル事ヲ得ズト云フ，Straßburg¹¹⁴⁾ 氏モ亦同様ニ本纖維ノ増殖及ビ肥厚ヲ認メ，高度ニ犯サレタル部分ニ於テハ其放線狀纖維ト纏絡纖維トノ區別明カナラズヲ云ヒ一方小葉内ニ於テハ屢々本纖維ノ増殖僅少ナルカ又ハ殆ド増殖セズ或ハ反ツテ減少ヲ認ムル事アリト云フ，如斯状態ハ吾人ノ例ニ於テモ亦認ムル事ヲ得，吾人ノ例ニ於テハ全テ殆ド同様ニ本纖維ハ肝臟被膜下，小葉周邊部及ビ中心靜脈ノ周圍ニ於テ著シク増殖スルヲ認ム，而シテ其増殖セル本纖維ノ配列ハ一部ニ於テハ極メテ纖細ナル纖維ガ密ニ網ヲ形成スルモ，此部ニ特ニ多數ニ到ル所ニ見ル肥厚セル纖維ハ著シク雜ニシテ疎ナル網ヲ形成シ，恰モ甚シク荒蕪セルノ觀ヲ呈シ，殊ニ中心靜脈ノ周圍ニ存在スルモノニ於テ明カニ認ムル事ヲ得，一方小葉

内ニ存在スル本纖維ハ一般ニ著シク不平等ナリ、或小葉ニ於テハ纏絡纖維高度ニ増殖シテ極メラ密ナル網ヲ形成セルモノアリ（第八圖）、或ハ比較的輕度ノ増殖ヲ示スモノアリ（第七圖）、他方ニ於テハ本纖維ノ極メラ僅少ナルアリ、或ハ殆ド見ザルアリ、如斯變化ハ一小葉内ニ於テモ亦認ムル事ヲ得。尙ホ肝細胞ノ比較的的正常ノ配列ヲ爲スモノニ在リテモ如斯纖維ノ増殖ノ不平等ハ往々認ムル事ヲ得。殊ニ高度ニ犯サレタル第二例ニ於テハ肝細胞ノ小ナル群ヲ爲シ増殖セル結締織ノ間ニ介在スル如キモノニ於テハ往々著シキ本纖維ノ増加ヲ見且肥厚シ到ル所膠樣纖維ニ變ズルモノヲ認ムルモ一方結締織ノ増殖甚シクシテ肝細胞ヲ認メ得ザル部分ニ於テハ本纖維モ亦認メザル部分多シ。上記比較的的正常ナル肝細胞ノ配列ヲ爲スモノニシテ本纖維發育ノ不平等ヲ呈スルハ中心靜脈ト小葉内結締織トノ中間部ニ於テ特ニ現ハル、小葉内ニ於テモ本纖維ノ増殖ノ他尙ホ肥厚セル纖維ヲ到ル所ニ認ム殊ニ肝細胞柱ノ間ヲ走ル、即チ所謂放線狀纖維ト稱セララルモノニ多シ。

尙ホ本纖維ノ性狀ニ關シテハ一般ニ全テノ例ニ於テ其程度ニ差コソアレ其屈曲ハ著シク急ニシテ圓滑ヲ失ヒ且到ル所局部ノ肥厚ヲ示スヲ以テ一見枯レタル樹枝又ハ樹根ヲ見ルガ如キモノ多ク上記 Rössle⁹⁵⁾ 氏ガ慢性炎症ニ於テ又高年者ニ於テ屢々見ル硬化ヲ來タサシメタル纖維ト云ヒシモノト類似セル性狀ヲ爲ス（第七圖、第八圖）即チ吾人ハ格子狀纖維ハ遺傳毒兒ノ肝臟ニ於テハ Sklerose ヲ起スモノナリト信ズルモノナリ。

次ニ前章ニ於テ述べタル遺殘セル造血細胞竈ト格子狀纖維トノ相互關係ニ就キテ見ルニ、血管内ニ存在セル造血細胞ノ小群ニ於テハ本纖維ハ全然關係セザル事明カナルモ（本纖維ノ配列上）實質内ニ存在スル大ナル細胞竈ニ在リテハ其細胞竈中ニ纖細ナル僅少ナル纖維ガ周圍ニ配列スル本纖維ト連リテ進入スルモノアルヲ見ル、此纖維ハ周圍ニ於テ配列スルモノニ比シテ其屈曲著シク少シ、之即チ本細胞竈ガ血管外ニ存在スルヲ示スモノナリ。吾人ハ造血現象ニ對スル根本的研究ヲ行ハザルヲ以テ本現象ガ血管内ニ於テ行ハルトノ說ニ對スル批判ハナシ得ザルモ少クトモ此事實ハ本現象ガ血管外ニ於テ肝細胞トノ間ニ於テモ亦行ハルルモノナル事ヲ主張セントスルモノナリ。

八 總 括

遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル變化ハ多種多様ニシテ其各々ノ變化ヲ探求スルト共ニ必ズ其相互關係ヲ考ヘザル可カラズ、即チ上記結締織、造血現象、「プラスマ」細胞、格子狀纖維ノ變化ノ相互關係ト共ニ肝細胞自身ノ變化、血管壁ノ微毒性變化ヲモ考フル事ハ本症ノ診斷ニ於テモ亦重大ナル意義ヲ有スルモノナリ。

上記諸變化ハ一般ニ互ニ平行スルモ時ニ平行セザルアリ更ニ他ノ條件ノ加ハルニ依リテ此相互關係ハ著シク複雑トナルモノナレ共大體ニ於テ一定ノ關係ヲ示スモノナリ。例セバ本症ニ於ケル造血現象ハ他ノ諸變化ト大體ニ於テ平行シ結締織ノ増殖ノ多キモノニ於テ多數ニ現ハルルガ如キモ、此現象ハ同時ニ其年齡ニ關係ヲ有ス、即チ結締織ノ増加ハ一方ニ於テ其微毒ノ強サニ關係スルモ年齡ヲ増セルモノニ於テハ益々肝細胞ノ間ニ多數ニ進入シテ硬變ノ度ハ高度トナルニ造血現象ハ之ト逆ニ年齡ノ増加ト共ニ減少スル事明カナリ、然レ共其病源ニ依リテ強度ニ犯サレタル場合ニ於テハ造血現象モ更ニ高度ニ殘存ス可ク此間ハ著シク複雑ナル關係ヲ生ズ可シ。「プラスマ」細胞ノ發現ノ如キモ大體他ノ諸變化ニ準ズルガ如キモ之モ亦其度ニ比例シテ高度ニ増減アルガ如ク考ヘラレズ即チ第二例ニ於ケルガ如ク著シク高度ニ犯サレタルモノニ在リテモ本細胞ハ他ノ比較的變化ノ少キモノニ比シテ其變化ニ比例シテ著シク多數ニ現ハレザルガ如シ。又格子狀纖維ノ状態ニ至リテハ結締織ノ異常ニ高度ニ發育セシ部ニ於テ屢々本纖維ヲ見ザルハ其結締織ノ異常發育ノ爲メニ破壞サレタルモノナリヤ或ハ亦始メヨリ發育セザリシモノナリヤ明カナラズ、即チ正常ナル場合ニハ胎生ノ末期ニ近ク完全サレ可キモノナルモ格子狀纖維ガ肝細胞ノ發育ト同時ニ行ハレ結締織ノ異常増殖ガ後ニ於テ始マリシモノトセバ當然結締織ノ異常發育ニ依リテ破壞サレタルモノアル可キハ疑ヒヲ入レズ、然レ共モシ結締織ノ異常發育ガ肝細胞ノ發育ト同時ニ乃至ハ初期ニ於テ異常ニ發育ヲ始メシト考フル時ハ或ハ始メヨリ格子狀纖維ノ發育セザリシモノアルニ非ラズヤトモ考ヘラル。而シテ一方結締織ノ發育比較的高度ナラザルモノニ在リテ格子狀纖維ノ増殖ガ一部ニ於テ弱キカ、稀ニ殆ド見ザル部分ノ存在スルハ其發育ノ著シク遲延セルモノト考フ可ク而シテ尙ホ此關係ハ上記高度ニ犯サレタルモノノ本纖維ヲ見ザル部分ノ全テニ適合サル可キモノナリヤ否ヤ疑問トセザル可カラズ、即チ高度ニ結締織ノ發育セルモノニ在リテハ到ル所ニ肝細胞ノ死滅スルヲ見ル事ヲ得レバナ

リ。又上記小葉中ノ本纖維ノ發育少キ部ヲ有スルモノニ在リテハ造血現象ハ稍多數ニ遺殘セルモノノ如シ。而シテ上記格子狀纖維ノ硬化、肥厚、膠化等ハ一般ニ肝臟ノ諸種變化ニ比例シテ現ハルルガ如シ。尙ホ造血現象ト格子狀纖維ノ相互關係ニ就キテハ多數ノ造血細胞ヨリナル竈ニ於テ其中ニ格子狀纖維ノ進入シ、或ハ格子狀纖維網内ニ造血細胞ノ小群ノ存在スルモノニ在リテハ（之造血現象ガ血管外ニ於テモ行ハルルモノナリト主張スル所以ナル事前章ニ於テ述ベタル如シ）Saxer 氏ニ依レバ此造血竈ハ後ニ毛細管ト交通ヲ生ズト云フ、モシ之ガ事實ナリトセバ此細胞群ノ流血中ニ去リシ後ハ毛細管ノ一部トナル可キヤ或ハ此部ハ新シク肝細胞ニ依リテ占メラル可キモノナリヤ、モシ又肝細胞ニ依リテ占メラルルモノトセバ新生肝細胞ト格子狀纖維（元竈中ニ存在セシ）トノ相互關係ハ如何ニナル可キヤハ明カナラズ。又「プラズマ」細胞ハ上記ノ如ク結締織ノ異常發育、遺殘セル造血現象等ハ特ニ關係ヲ有ス可シトハ考ヘラレズ、殊ニ本細胞ガ後天性微毒ノ場合ニ於テハ比較的多數ニ現出スルヲ見得ルモノナルニ遺傳微毒兒ニ於テハ遙ニ少數ニ現ハルルハ其間ニ如何ナル關係ノ存在セルヤ疑問トセザル可カラズ。又上記顯微鏡的所見ニ於テ見ルガ如ク何レノ例ニ於テモ比較的幼若ナル肝細胞ヲ見ル事ヲ得、之破壊ニ次デ來ル肝細胞ノ新生ナル可シト雖一方ニ於テハ比較的變化少キモノニ於テモ亦屢々如斯細胞ヲ見ル事ヲ得、即チ前記格子狀纖維ノ發育狀態ト竝ベ考フル時ハ甚ダ興味アル所見ナリトス。尙ホ本症ニ於テ血管壁ノ變化ハ又何レノ例ニ於テモ見ル事ヲ得、之即チ同時ニ犯サレタル動脈炎乃至ハ靜脈炎ナル可ク、此變化モ亦他ノ諸變化ト其程度ニ於テ平行セルガ如シ。

次ニ肝臟ニ於ケル本症ノ診斷ヲナスニ當リテ其高度ナルモノニ於テハ其結締織ノ異常増殖ノ狀態ノミニテモ診斷スルニ難カラズト雖輕度ナル場合ニ於テハ一見迷ハサルル事モアルベシ、即チ結締織ノ發育モ前章ニ於テ述ベタル如ク、一見 Hanot 氏ノ硬變症ニ類似スルモノアリ。又造血現象ノ遺殘スルモノナルモ之モ遺傳微毒ノミニ特有ナルモノニ非ザル事已ニ Swart 氏ノ研究ニ依リテ明カナリ即チ之ノミニテ本症ノ診斷ヲ爲ス可クモ非ラズ、「プラズマ」細胞ノ現出ハ相當有力ナル可キモ其發現極メテ少數ナルヲ以テ之ノミニテモ迷ハサル可ク、格子狀纖維ノ變化ハ比較的確實ナルモノナリト信ズレ共、必ズヤ上記諸變化ノ共存ヲ必要トセザル可カラザルナリ。

九 結 論

- 一、吾人ノ第二例ハ最モ高度ナル遺傳微毒ニ依ル肝臟硬變ヲ示スモノナリ。
- 二、小葉間結締織ノ輕度ニ増殖セル遺傳微毒兒ノ肝臟ニ在リテモ其小葉内ニ於テ各程度ノ差ハアレ共結締織ノ増殖ヲ來スモノナリ。
- 三、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル結締織ノ異常發育ハ、小葉間結締織中、殊ニグリッソン氏鞘ノ部ニ於テ最モ高度ナリ。
- 四、高度ニ非ザル遺傳微毒兒ノ肝臟ニ發育セル結締織ノ狀態ハ著シク Hanot 氏ノ肝硬變症ニ類似スルモノアリ、即チ吾人ハ本硬變ヨリ Hanot 氏型ノ肝臟硬變症ニハ其原因ノ微毒ニヨルモノアルニ非ラズヤト考フルモノナリ。
- 五、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於テハ胎生期ニ行ハルル造血現象ガ出産後モ今日迄考ヘラレタルヨリ遙ニ長期ニ殘存スルモノニシテ生後十箇月ノ遺傳微毒兒ニ於テモ尙ホ見ル事アリ。
- 六、肝臟内ニ行ハルル造血現象ハ血管内ニ於テ行ハルト爲スモノト血管外ニ於テ行ハルト爲スモノアルモ吾人ハ血管内ニ於テ行ハルル本現象ニ對シテハ否定セザルモ少クトモ血管外ニ於テ血管ト肝細胞柱ノ間ニ於テモ亦行ハルルモノナルヲ主張セントス。
- 七、遺傳微毒兒ニ於テハ屢々少數ナルモ「プラスマ」細胞ガ現出スルモノニシテ、此細胞ノ現出ハ本症ノ診斷ニ有力ナル意義ヲ有スルモノナリトス。
- 八、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル格子狀纖維ハ一般ニ増殖ヲ認ム、殊ニ小葉間結締織、中心靜脈周圍部ニ於テ高度ナリ。
- 九、小葉内格子狀纖維モ一般ニ増殖ヲ示セドモ著シク不規則ニシテ一方ニ於テ増殖ヲ認メザルカ或ハ本纖維ヲ認メザル部分アリ。
- 十、遺傳微毒兒ノ肝臟ニ於ケル格子狀纖維ハ到ル所膠樣纖維ニ變化セルヲ認メ且 Sklerose ヲ來スモノナリ。
- 十一、上記格子狀纖維ハ又到ル所肥厚ヲ示ス、殊ニ小葉間結締織及ビ中心靜脈ノ周圍部ニ於テ甚シ。
- 十二、遺傳微毒兒肝臟ニ於ケル變化ハ一般ニ平行スルモ時ニ全然平行セザルモノアリ、且變化ノ比一様ナラズ。

撰筆スルニ臨ミ恩師田村博士ノ懇篤ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ取ラレシ事ニ深甚ナル感謝ヲ表ス、尙ホ本研究ニ用ヒタル貴重ナル材料ノ御惠與ヲ受ケタル東京、泉橋慈善病院病理部長福士博士ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表ス。

Literatur.

- 1) **Ackermann**, zit. aus Sormani, Virchow's Archiv. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 2) **Alagna**, Die Plasmazellen in der entzündlicher Infiltrate einer Krebstumors des Magens, Virchow's Archiv. Bd. 204, S. 136, 1911.
- 3) **Albers-Schönberg**, Ueber fötale Syphilis, Münch. med. Wochenschr. 1896, Nr. 19.
- 4) **Almkvist**, Beiträge zur Kenntnis der Plasmazellen, insbesondere beim Lupus, Archiv für Dermatologie und Syphilis. Bd. 58, 1901.
- 5) **Aschoff**, Lehrbuch der Pathologische Anatomie. 1923.
- 6) **Baerensprung**, zit. aus Erdman, Deutsches Archiv für Klinische Medizin. Bd. 74, 1902.
- 7) **Ballantayne**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der Allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 8) **Barthélemy**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv für Klinische Medizin. Bd. 61, 1898.
- 9) **Baumgarten**, Miliare Syphilis der Milz, Virchow's Archiv. Bd. 97, S. 36, 1884.
- 10) **Baumler**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv für Klinische Medizin. Bd. 61, 1898.
- 11) **Beck**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv für klinische Medizin. Bd. 61, 1898.
- 12) **Birch-Hirschferd**, Beiträge zur pathologischen Anatomie der hereditären Syphilis Neugeborener, Archiv f. Heilk. XVI, S. 166, 1875.
- 13) **Böhm-Dawidoff**, Lehrbuch der histologie des Menschen einschliesslich der mikroskopischen Technik. Auf. 1, 1903.
- 14) **Boll**, Die Binde substanz der Drüsen, Arch. f. mikrosk. Anat. Bd. 15, S. 334 bis 335, 1869.
- 15) **Boll**, Untersuchungen über den Bau und die Entwicklung der Gewebe, Arch. f. mikr. Anatomie. Bd. 7, II Abt.
- 16) **Bosellini**, zit. aus Porcile, Ziegler's Beiträge. Bd. 36, S. 375, 1904.
- 17) **Caillé**, Zur pathologische Anatomie der congenital Syphilis, I-D. Würzburg. 1869.
- 18) **Ceelen**, Ueber Plasmazellen in den Niere, Virchow's Archiv. Bd. 211, S. 276, 1913.
- 19) **Chiari**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv für klinische Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 20) **Clarke**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 21) **Darier**, Besprechung Unna's Histopathologie, Annales de dermat. T. VI, 1895.
- 22) **Déjérine**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv für klinische Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 23) **Denys**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv für klinische Medizin. Bd. 74, 1902.
- 24) **Disse**, Ueber die Lymphbahnen der Säugetierleber, Arch. f. mikrosk Anatomie. Bd. 36, S. 203, 1890.
- 25) **Eberth**, Untersuchungen über die normale und pathologische Leber, Virch. Arch. Bd. 39, S. 70, 1867.
- 26) **Ehrlich**, Beiträge zur Kenntnis der Anilinfärbung und ihre Verwendung in der mikroskopischen Technik, Arch. f. mikrosk. Anatomie. Bd. 13, 1877.
- 27) **Erdmann**, Beiträge zur Kenntnis der kongenitalen Syphilis der Leber, Deutsches Archiv für klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 28) **Ewald u. Kuhne**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 29) **Fahner**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.

- 30) **Fischer**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 31) **Fleischl**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1919.
- 32) **Foà u. Salvoli**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, 1902.
- 33) **Förster**, Beiträge zur pathologische Anatomie der congenitale Syphilis, Würzb. med. Wochenschr. 1885, Nr. 47.
- 34) **Frenkel Moise**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 467, 1909.
- 35) **Gubler**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, 1902.
- 36) **Haars**, Beitrag zur Lehre von der diffusen, congenitalen Lebersyphilis. I-D. Keil, 1891.
- 37) **Hannes**, Ueber des Vorkommen und die Herkunft von Plasmazellen in der menschlichen Tränendrüse. Virch. Arch. Bd. 205, S. 410, 1911.
- 38) **Hecker**, Beiträge zur Histologie und pathologie der congenitaren Syphilis sowie zur normalen Anatomie des Fötus und Neugeborenen. Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 39) **Hecker**, Neueres zur Pathologie der congenitaren Syphilis. Jahrb. f. Kinderheilkunde. S. 375, 1900.
- 40) **Heinz**, Zur Lehre von der Funktion der Milz. Virch's Archiv. Bd. 168, S. 500, 1902.
- 41) **Henle**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 42) **Hering**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 43) **Hessler**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. I d. XII, S. 549, 1908.
- 44) **Heubner**, Syphilis im Kindesalter, Gerhard's Handbuch der Kinderkrankheiten. 1896.
- 45) **Hexhenimer**, Pathologischen Anatomie der kongenitaren Syphilis, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 46) **Hintzen**, Beiträge zur pathologischen Anatomie und Histologie der congenitale Syphilis. I-D. Tübingen, 1869.
- 47) **His**, Beiträge zur Kenntnis der zum Lymphsystem gehörigen Drüsen, Zeitschr. f. wissensch. Zoologie. Bd. 16, S. 333, 1860.
- 48) **Hochsinger**, Zur Pathogenese der congenitalen Frühsyphilis, Dermatol. Centralb. II, 9.
- 49) **Hodara**, Komm in den blutbereitenden Organen des Menschen normalerweise Plasmazellen vor? Monatschr. f. prakt Dermatologie. Bd. 22, 1896.
- 50) **Howitz**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, 1898.
- 51) **Hutinel u. Hudelo**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 52) **Imminger u. Frey**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 53) **Jadassohn**, Demonstration von Unna's Plasmazellen und eosinophilen Zellen im Lupus und anderem Gewebe. Arch. f. Dermatologie und Syphilis. Ergänzungsheft I, 1892.
- 54) **Joannovics**, Ueber Plasmazellen. Ztbl. f. allg. Path. Bd. 20, 1909.
- 55) **Justi**, Ueber Unnaschen Plasmazellen in den normalen und tuberkulösen Granulationen. Virch. Arch. Bd. 150, S. 197, 1897.
- 56) **Kassowitz**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 57) **Kaufmann**, Spezielle pathologische Anatomie, Bd. II, 1922.
- 58) **Kindelen**, Ueber Pneumonie bei syphil. Neugeb. I-D. Würzburg. 1893.

- 59) **Kölliker**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, 1902.
- 60) **Kon**, Das Gitterfasergewebe der Leber unter normalen und pathologischen Verhältnissen, Arch. f. Entwicklungsmech. d. Organismen. Bd. 25, 1908.
- 61) **Krompecher**, Beiträge zur Lehre von den Plasmazellen, Ziegler's Beiträge. Bd. 24, 1898.
- 62) **Kupffer**, Ueber Sternzellen der Leber, Arch. f. mikrosk. Anatomie. Bd. 12, S. 352.
- 63) **Derselbe**, Ueber die sog. Sternzellen der Säugtierleber, Arch. f. mikrosk. Anatomie. Bd. 54, S. 254, 1899.
- 64) **Leydig**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 65) **Lomer**, Ueber die Bedeutung der Wegner'schen Knochenkrankung Zietschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. X, 1884.
- 66) **Löwit**, Die Anordnung und Neubildung vom Leukoblasten und Erythroblasten in den Blutzellen bildenden Organen, Arch. f. mikrosk. Anat. Bd. 38, 1892.
- 67) **Lubarsch**, Ueber die diagnostische Bedeutung der sogenannten miliaren Lebergummata. Verh. d. deutschen pathol. Gesellsch. 1909.
- 68) **Machat**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 69) **Mac Gilavry**, zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 70) **Marchand**, Ueber congenitale Lebercirrhose bei Syphilis, Centralb. f. allg. Path. u. path. Anat. Bd. VII, S. 273, 1896.
- 71) **Derselbe**, Zur Kenntnis der sog. Bantischen Krankheit und der Anaemia splenica, Münch. med. Wochenschr. S. 463, 1903.
- 72) **Derselbe**, zit. aus Sormani, Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 73) **Maresch**, Ueber Gitterfasern der Leber und die Verwendbarkeit der Methode Bierschowsky's zur Darstellung feinsten Bindegewebsfibrillen, Zentralbl. f. allg. Pathologie u. path. Anat. Bd. 16, 1905.
- 74) **Marschalkö**, Ueber die sog. Plasmazellen, ein Beitrag zur Kenntnis der Herkunft der entzündlichen Infiltrationszellen, Arch. f. Dermat. u. Syph. Bd. 30, 1894.
- 75) **Derselbe**, Zur Plasmazellenfrage, Centralbl. f. allg. Path. u. path. Anat. Bd. 10, S. 851, 1899.
- 76) **Maximow**, Experimentelle Untersuchungen über die entzündliche Neubildung von Bindegewebe. Ziegler's Beiträge, Supplementheft V, 1902.
- 77) **Meyer**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 78) **Miura**, Beiträge zur Histologie der Leber, Virch. Arch. Bd. 97, S. 142, 1884.
- 79) **Mraček**, Die Syphilis des Herzens. Arch. f. Derm. u. Syph. 1893, Ergänzungsheft 2, S. 279.
- 80) **Müller**, zit. aus Hecker, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 81) **Neumann**, Neue Beiträge zur Kenntnis der Blutbildung, Arch. f. Heilkunde. Bd. 15, S. 441, 1874.
- 82) **Oberndorfer**, Die viscerale Form der congenitalen Syphilis. Virch. Arch, Bd. 159, 1900.
- 83) **Oppel**, Unsere Kenntnis von der Entstehung der rothen und weissen Blutkörperchen. Centralbl. f. allg. Path. u. path. Anat. Bd. III, S. 193, 1892.
- 84) **Derselbe**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 85) **Derselbe**, Lehrbuch der vergleichenden mikroskopischen Anatomie der Wirbeltiere, III. Teil; Mundhöhle, Bauchspeicheldrüse, Leber. 1900.

- 86) **Pappenheim**, Wie verhalten sich die Unna'schen Plasmazellen zu Lymphozyten? Virch. Arch. Bd. 165 u. 166, 1901.
- 87) **Derselbe**, Weitere kritische Ausführungen zum gegenwärtigen Stand der Plasmazellenfrage. Virch. Arch. Bd. 169, 1902.
- 88) **Paltauf**, Entzündliche Neubildung. Ergebnisse der allg. path. morphol. u. Physiol. S. 277, 1895.
- 89) **Porcile**, Untersuchungen über die Herkunft der Plasmazellen in der Leber. Ziegler's Beiträge. Bd. 36, S. 375, 1904.
- 90) **Prötz**, Ueber Plasmazellenbefunde in der Milz. Zentralbl. f. allg. Path. u. path. Anatomie. Bd. 14, 1910.
- 91) **Ramon y Cajal**, zit. aus Sormani, Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 92) **Reichert**, zit. aus Erdmann, Deutsches Archiv f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 93) **Rössle**, Ueber Metaplasie der Gitterfasern bei wahrer Hypertrophie der Leber. Verhdlg. d. deutsch. pathol. Gesellsch. Bd. XII, 1908.
- 94) **Derselbe**, zit. aus Strassburg, Ziegler's Beiträge. Bd. 58, S. 615, 1914.
- 95) **Derselbe u. Yoshida**, Das Gitterfasergüst der Lymphdrüsen unter normalen und pathologischen Verhältnissen. Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 110, 1909.
- 96) **Ruge**, Ueber den Fötus sanguinolentus, Zeitschr. f. Geb. u. Gyn. Bd. 1, 1877.
- 97) **Runge**, zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 98) **Russakoff**, Ueber die Gitterfasern der Lunge unter normalen und pathologischen Verhältnissen. Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 99) **Saxer**, zit. aus Erdmann, Dentsce. Arch. f. klin. Med. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 100) **Scheltema**, zit. aus Sormani, Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 101) **Schukowsky**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 102) **Schlesinger**, Plasmazellen und Lymphocyten. Virch. Arch. Bd. 169, 1902.
- 103) **Schlichter**, Ueber Lues hereditaria. Wien. klin. Wochenschr. 1891.
- 104) **Schmidt, M. B.**, Ueber Blutzellenbildung in Leber und Milz unter normalen und pathologischen Verhältnissen. Ziegler's Beiträge. Bd. XI, S. 199, 1892.
- 105) **Schmidt**, Ueber die Stützsubstanz der Leber im normalen und pathologischen Zustand. Ziegler's Beiträge. Bd. 42, S. 606, 1908.
- 106) **Schott**, Jahrb. f. Kinderheilkunde. Bd. IV, S. 228, 1860.
- 107) **Schottländer**, Ueber Eierstocktuberkulose. Jena, Fischer. 1897. zit. aus Sormani, Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 108) **Schridde**, Ueber die Wanderungsfähigkeit der Plasmazellen. Verhandl. d. Deutsch. path. Gesellschaft. 10 Tagung, 1906.
- 109) **Derselbe**, Myeloblasten, Lymphoblasten und lymphoblastische Plasmazellen. Ziegler's Beiträge. Bd. 41, S. 223, 1907.
- 110) **Schüppel**, Peripylephlebitis syphilitica bei Neugeborenen. Arch. f. Heilkunde. Bd. XI, 1870. zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.

- 111) **Schwarz**, Studien über im grossen Netz des Kaninchens vorkommende Zellformen. Virch. Arch. Bd. 175, S. 209, 1905.
- 112) **Sormani**, Ueber Plasmazellen in der entzündlichen Infiltrate einer Krebstumors des Magens. Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 113) **Stöhr**, Lehrbuch der Histologie. 1922.
- 114) **Strassburg**, Die Gitterfasern der Leber bei kongenitaler Syphilis. Ziegler's Beiträge. Bd. 58, S. 615, 1914.
- 115) **Stricht**, zit. aus Erdmann, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 116) **Swart**, Vier Fälle von pathologischer Blutbildung bei Kindern. Virch. Arch. Bd. 182, S. 419, 1905.
- 117) **Tepel**, Ueber cong. Syphilis. I-D. Berlin, 1874. zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 118) **Testelin**, zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 119) **Tobeitz**, Ein Beitrag zur Casuistik der Syphilis hereditaria. Arch. f. Kinderheilk. Bd. XVI, S. 45, 1893.
- 120) **Toldt**, -zit. aus Russakoff, Ziegler's Beiträge. Bd. 45, S. 476, 1909.
- 121) **Toldt u. Zuckerkandl**, Ueber die Form- u. Texturveränderung der menschl. Leber während des Wachstums. Wiener Sitzgsber. Bd. 72, S. 241, 1876. zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 122) **Tonkow**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 123) **Unna**, Histopathologie der Haut. 1894.
- 124) **Derselbe**, Ueber Plasmazellen, insbesondere beim Lupus. Monatschr. f. prakt. Dermatologie, Bd. 12, 1891.
- 125) **Derselbe**, Ueber die Bedeutung der Plasmazellen für die Genese der Geschwülste der Haut, der Granulome und anderer Hautkrankheiten. Berliner klin. Wochenschr., No. 49, 1892.
- 126) **Derselbe**, Gegenbemerkungen. Berliner klin. Wochenschr., No. 9, 1893.
- 127) **Virchow**, Ueber die Natur constitutionell syphilitischer Affektion. Virch. Arch., Bd. 15, S. 217, 1858.
- 128) **Derselbe**, Ein Fall von Transposition der Eingeweide und ausgedehnten Lokalerkrankungen beim Neugeborenen. Virch. Arch., Bd. 22, S. 426, 1861.
- 129) **Wagner**, Das Syphilom. Arch. d. Heilk. Bd. V, S. 139, 1864. zit. aus Erdmann, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin., Bd. 74, S. 458, 1902.
- 130) **Waldeyer**, Ueber Bindegewebszellen. Arch. f. mikroskopische Anatomie, Bd. II, 1875.
- 131) **Weber**, Ueber die Bedeutung der Leber für Bildung der Blutkörperchen der Embryonen. Zeitschr. v. Henle u. Pfeuffer. IV, S. 160, 1846. zit. aus Erdmann, Deutsch. Arch. f. klin. Med. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 132) **Wegner**, Ueber hereditäre Knochensyphilis bei jungen Kindern. Virch. Arch. Bd. 50, S. 305, 1870.
- 133) **Werdt**, Zur Histologie und Genese der miliaren Lebergummen. Frankf. Zeitsch. f. Pathologie., Bd. 12, 1913.

- 134) **Westphal**, Ueber Mastzellen. I-D. Berlin, 1880. zit. aus Sormani, Virch. Arch. Bd. 184, S. 177, 1906.
- 135) **Wilks**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie, Bd. XII, S. 549, 1908.
- 136) **Winkel**, zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 137) **Winogradow**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 138) **Wronka**, zit. aus Erdmann, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 139) **Zeissl**, Ueber Syphilis cong. der Neugeb. u. Säuglinge. Oesterr. Jahrbuch f. Kinderheilk. 1857. zit. aus Hecker, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 61, S. 1, 1898.
- 140) **Unna**, Die Herkunft der Plasmazellen. Virch. Arch., Bd. 214, S. 320, 1913.
- 141) **Loder**, Lues congenita der Leber, Lungen u. Nieren. I-D. Würzburg, 1897. zit. aus Erdmann, Deutsch. Arch. f. klin. Medizin. Bd. 74, S. 458, 1902.
- 142) **Foà**, Zit. aus Porcile, Ziegler's Beiträge. Bd. 36, S. 375, 1904.
- 143) **Hexheimer**, Zur Pathologie der Gitterfasern der Leber. Verhandlg. d. Deutsch. Path. Gesellsch. XI, 1907.
- 144) **Hochsinger**, zit. aus Hexheimer, Ergebniss der allgemeine Pathologie. Bd. XII, S. 549, 1908.
- 145) **Rössle**, Ueber die Leber bei Diabetes. Verhandlg. d. Deutsch. Pathol. Gesellsch. XI, 1907.

附 圖 說 明

第一圖 高度ニ結締織ノ發育セル肝臟實質。(第二例)

- b. g. 高度ニ發育セル結締織纖維束.
- l. z. 島嶼狀ヲナセル肝細胞.
- b. z. 遺殘セル造血細胞群.
- b. g. 多數ノ血液細胞ヲ有スル血管.
- g. b. 異常ニ發育セル血管周圍結締織.

第二圖 肝臟小葉内ニ進入スル大ナル結締織纖維束及ビ異常ニ發育セル小葉間結締織。(第三例)

- b. g. 小葉内ニ進入スル大ナル結締織纖維束.
- b. z. 肝細胞ノ間ニ遺殘スル血液細胞.
- a. g. 高度ニ發育セル小葉間結締織.

第三圖 グリッソン氏鞘附近ノ結締織ノ高度ニ發育セルモノ。(第四例)

- g. g. 高度ニ結締織ノ増殖セルグリッソン氏鞘周圍.
- b. g. 小葉内ニ進入スル小ナル結締織纖維束.
- b. z. 肝細胞柱間毛細管内ノ小ナル血液細胞群.

第四圖 結締織ノ異常ニ増殖セル中心靜脈。(第六例)

- c. b. 中心靜脈ヲ取圍ミテ異常ニ増殖セル結締織層.
- b. g. 小葉内ニ放射狀ニ進入スル結締織纖維束.

第五圖 擴張セル毛細管内ニ存在スル各種ノ異常細胞。(第三例)

- u. z. 赤血球ノ原始細胞.
- f. z. Saxer氏ノ云フ第一度ノ細胞ニ相當スル細胞.
- s. z. Saxer氏ノ第二度ノ細胞ニ當タル細胞.
- k. z. 有核赤血球.
- k. t. 血液細胞ノ核分裂像.

第六圖 小葉内ニ發育セル結締織纖維束。(第五例)

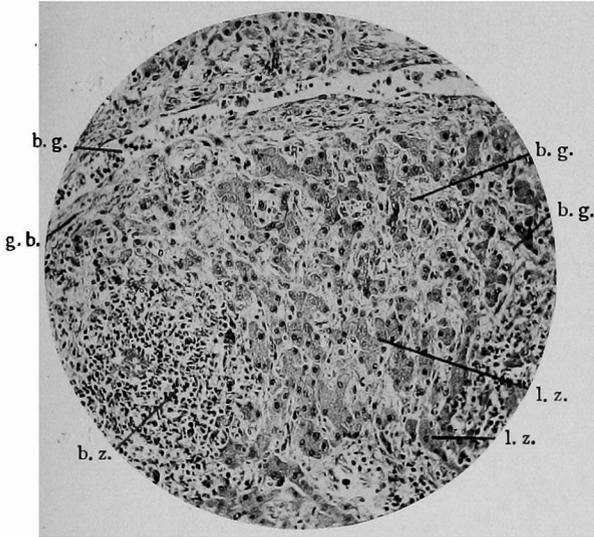
- b. g. 小葉内ニ發育セル小結締織纖維束.
- b. z. 充血セル毛細管内ニ於ケル血液細胞.

第七圖 輕度ニ増殖シ且硬化セル格子狀纖維ノ状態ヲ示ス。(第一例)

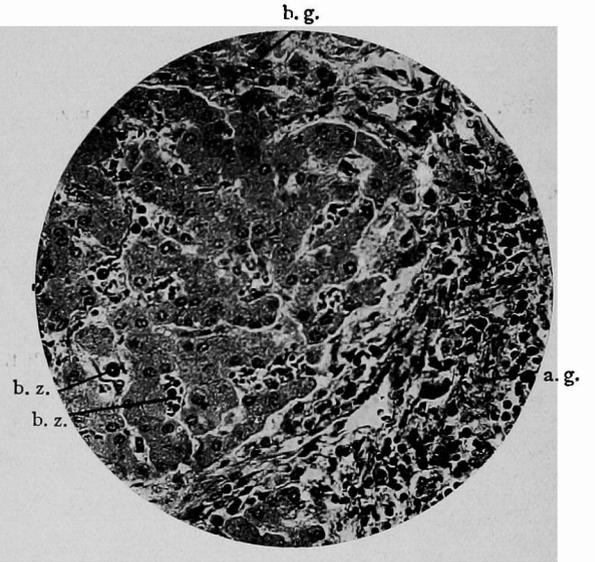
第八圖 高度ニ増殖シ且硬化セルヲ示ス格子狀纖維ノ状態ヲ示ス。(第四例)

橫尾論文附圖

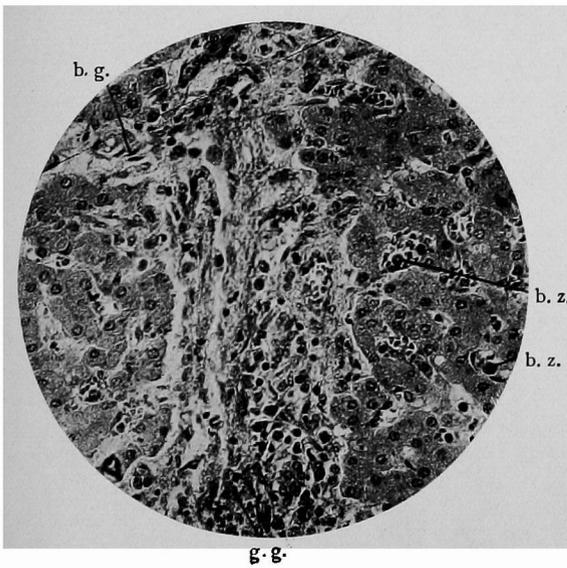
第一圖



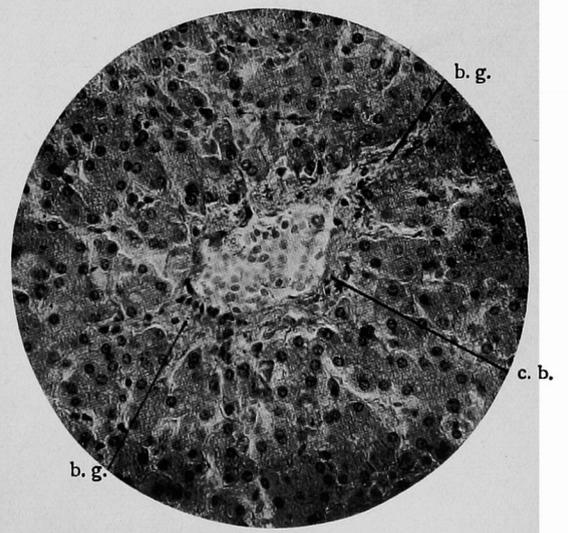
第二圖



第三圖

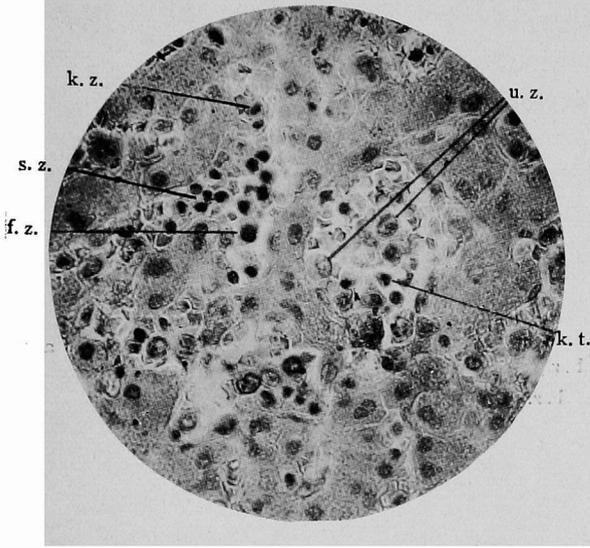


第四圖

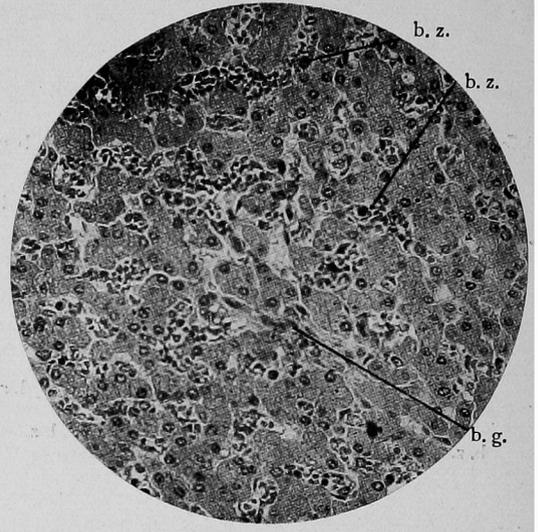


橫尾論文附圖

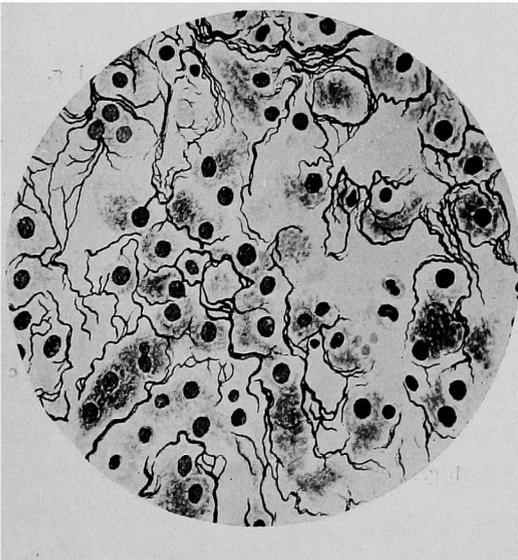
第五圖



第六圖



第七圖



第八圖

